いち、に―、３組！

久沙ミミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いち、に一、３組！

【Ｎコード】
Ｎ３２０８Ｕ

【作者名】
久沙ミミ

【あらすじ】
伝統ある名門中学校へ入学することになった翔太は、一人の美少年と運命的な出会いをする――全寮制中高一貫の男子校で繰り広げられる、少年たちの友情、青春物語！
※少年同士のちょっと行き過ぎちゃった友情（てかＢＬ？）が主成分ですので、苦手な方はご注意を！
※基本はくだらないギャグですが、たまに下ネタ、ＢＬネタという地雷が埋まってますので足元にお気をつけ下さい。

第一話　出会いの季節

カタンコトン

カタンコトン

穏やかな揺れは眠気を誘う。
陽射しは幾分春らしくなったが、まだ雪が残る田舎道。
その寂れた線路の上を一台の列車が走っていた。
向かえ合わせの二人掛けの座席が列んでいる、都会では中々お目に掛かれない昔ながらの車両である。
平日の昼間のせいか乗客はまばらで、そのほとんどが老人だった。
そんな中、あどけない顔をした少年が一人ぽつんと座っていた。
足元には大きなキャリーバッグが幅をきかせている。
彼の名は、長野翔太。
健康的な艶のある肌をしていて、利口そうな額にはサラサラとした細い髪が流れている。
取り立てて美少年というわけではないが、母性本能をくすぐる顔立ちではある。
「はぁ…」
車窓の景色を眺め、翔太は大きな溜息をついた。
見覚えのある風景はとっくの昔に過ぎ去り、見えるのは木々や田んぼばかり。
目的地に近付くにつれ、解け残りの雪の量が増えていく。
それは彼の胸の中の不安を煽り立てた。
何を隠そう彼は今、超名門進学校「北城学園」の寮へ入るべく、１２年間育った親元を離れ、一人学園へと向かっている最中なのである。

私立北城学園は、北海道の田舎にそびえ立つ完全なる中高一貫の全寮制男子校で、１２歳から１８歳までの少年達がこの敷地内で生活を共にし、青春を謳歌している。
学校周辺には森と田んぼと畑しかなく、その上男子校ときているので、道の踏み外しようがないという寸法だ。
入学するのは大変難しいが、無事卒業できれば、有名大学への進学がほぼ約束されているようなものだと言われている。
それに加え、学費免除等の特待生制度も充実していて、お金持ちの子ばかりでなく、ごく一般家庭の子供達にも広く門戸は開かれているため、幅広い層からの人気が非常に高い。
ちなみに高校からの募集はしておらず、中学受験のみがこの学び舎の一員となる唯一のチャンスとなる。
翔太の家も特別裕福というわけではなかったが、教育熱心な親の勧めで受験するに至ったのである。
親の期待に応えるため、また自分自身のために、翔太は死にもの狂いで勉強した。
だが、さすがは難関校として名を馳せている北城学園。
小学校での成績はかなり良い方だったが、その入試問題のレベルの高さに愕然とした。
これなら特待生はおろか、合格できるかも怪しい。
いや、絶対受かるはずはない。
そう確信する程、難しかったのだ。
絶望感に苛まれながら試験会場を後にしたのを、今でも覚えている。
だから、その数週間後に合格通知書が届いた時は、夢かと疑い、何度も自分の頬をつねってしまった。
頬は痛い。
そして自分が手にしているのは、紛れも無く「合格通知書」だった。
その時は、言葉で言い表せないほどの喜びが沸き起こり、その場で飛び上がった。
本当に奇跡だと思ったのだ。

カタンコトン

カタンコトン

列車は規則正しく翔太を揺らす。
そんなことを思い出していると、なんだか眠くなってきた。
昨日なかなか寝付けなかったことも手伝って、その心地よい揺れに
誘われ、翔太はうとうとと夢の世界へと引き込まれていった。

カタンコトン

カタンコトン

ガタンッ！

突然の大きな揺れにはっと目を覚ました。
ふと足元を見ると、そこにあるはずのキャリーバッグがない。

ゴロゴロゴロゴロゴロ…

「あーっ！僕の荷物！」
なんとキャリーバッグが客席の通路を勢いよく走って行くではないか。
「こらー！待てー！」
翔太は慌てふためきながら追いかけた。
電車の中で転がるキャリーバッグ。

それを追い掛ける子供。
長年生きていてもそう滅多に見られるものではない珍風景に、他の乗客達はすっかりあっけにとられている。
「待て一！」
残念ながら、翔太はあまり運動神経が良い方ではない。
揺れる電車の中、何度もつまずきそうになりながらも必死で走った。
だが、そんなことはどこ吹く風か、キャリーバッグは車両の連結部分も余裕の顔でスルーして、前の車両へと突入する。
翔太もそれを追って飛び込んだ。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ…

背後から迫り来るその奇妙な音に、佐藤直矢は読みかけの本から顔を上げた。
座席から身をよじって後ろを見ると、なんとキャリーバッグが猛スピードで走って来るではないか。
「待て一！」
持ち主らしき子供の声。
直矢は意を決して、高速で接近するキャリーバッグをキッと見据えると、サッと座席から片手を突き出した。

ガシッ！

音を立ててキャリーバッグが止まる。
息を切らして駆け付けた所有者よりも一足早く、暴走キャリーバッグは第三者の手によって見事差し止められた。
翔太は呼吸を整えながら、キャリーバッグを支えてくれている手からその主の顔へと目線を移す。

すると、ちょうど相手も顔を上げたところだった。
目と目が合う。
翔太は思わず息を飲んだ。
そこにいたのは、かなりの美少年だったのだ。
年の頃は、同い年か少し年上くらいだろうか。
しなやかな黒い髪。
滑らかな肌。
きりっと整った目鼻立ち・・・
かあぁっと音を立てて翔太の顔が赤く染まっていく。
自分がかなり恥ずかしい状況に置かれているということに気付いたのだ。
「あ、ありがとうございます！」
黒目がちな瞳が二つ、真っ直ぐ直矢を見てこう言った。
それはまるで救世主を見るような（実際、翔太にとって彼は救世主なのだが）、尊敬と感謝に満ち溢れた瞳だった。
「あ、ああ…いや、別に」
なんだか気恥ずかしくなり、直矢もほんのりと頬を赤く染めて目線を反らす。
「すごい荷物だな。旅行？」
照れ隠しの為なのだろうか。
それとも「予感」というものを感じたのだろうか。
キャリーバッグを持ち主に引き渡すと同時に、思わず言葉が口をついて出た。
そんな自分自身に驚いた。
子供同士とはいえ他人と、それも見ず知らずの人に自分から積極的に話しかけるなんて普段の直矢なら考えられないことだったのだ。
「いえ、これから学校の寮に入るんです。これはそのための荷物で…」
この電車が向かう先で、寮がある学校といえば一つしかない。
「その学校ってもしかして…」

「「北城学園！！」」
二人の声が見事に重なった。
「すごい偶然だな…実は俺もこれからその学校入るんだ」
「ええ？！てことは同い年？！」
てことは１２歳かぁ…大人っぽいなぁ…
翔太は思わず目の前の少年を上から下まで眺め回した。
よく見れば、顔付きも体格だってまだまだ子供なのだが、その少年はどこと無く大人びて見えたのだ。
「ああ、そういうことになるな」
「わぁ！嬉しいな！僕、長野翔太。これからよろしくね！」
そう言って翔太はにっこりと微笑んだ。
真っ直ぐ自分へと向けられたその満面の笑顔に、直矢は少々面食らった。
「佐藤直矢。まぁとりあえず、よろしくな」
「良かった、知り合いがいなくて不安だったんだ。同じ学校から行く人誰もいなくて」
嬉しそうにそう話しながら、翔太は直矢の向かいの席に腰を降ろす。
「俺もだよ。まぁ、みんなそんなものじゃないの」
そう簡単に入れる学校ではない。一つの小学校から一人入ればいい方だ。
嬉しくてテンションが上がっていく翔太とは対象的に、直矢は一定の温度を保っていた。
「そうだよね。試験難しかったもんね。絶対落ちたと思ったよ。受かったのが嘘みたいだ」
「そんなの入ったもん勝ちだよ。それより、卒業の心配した方がいいぞ」
「へ？卒業？そんなのまだ先じゃん」
「甘い甘い。北城は入るのも難しいけど、出るのも難しいってのは常識だろ」
「いやぁ、入るのにいっぱいいっぱいで、出ることまで考えてなか

ったよ」
「聞いた話によると、中学校三年間の内容を一、二年生で、高校三年間の内容を三、四年生で習って、五、六年生はひたすら大学入試に向けて演習するらしい」
「うわぁ…」
てことは、通常の公立校でいう高校一年が終わった時点で、中高六年分の学習内容が終わっているということになる。
恐るべし中高一貫校！
「その上、かなり変わった教育方針らしい。詳しくは僕も知らないけど」
「どうしよう、なんだか不安になってきた～」
翔太の表情があまりにもくるくると変わるものだから、直矢もつい頬が緩み、いつの間にか自然と笑顔が浮かんでいた。
そのことにはっと自分で気付いた瞬間、ちょうど翔太と目が合う。
直矢はなぜか頬を赤らめ、慌てて目線を下に反らす。すると、例の暴走キャリーバッグが足元に佇んでいるのが目に入った。
「この荷物、上の荷棚に上げた方がいいんじゃない？でないとまた逃げられるぞ」
「そうしたいんだけど、さっき上げようとしたら、重くて持ち上がらなく…」
翔太が言い終わらないうちに、直矢は立ち上がり、キャリーバッグに手を掛けた。
「手伝うよ」
ぶっきらぼうな口調だったが、その目からは優しさが感じられる。
「わぁ、ありがとう！」
二人は力を合わせて、キャリーバッグを荷棚の上へ押し上げた。
「直矢には助けてもらいっぱなしだな」
「べ、別に足元にあったら邪魔くさかっただけだ」
「ところで、直矢の荷物は？」
翔太は周囲を見渡したが、それらしき物はどこにも見当たらない。

「ああ、それなら宅急便で寮に送ったよ」
な、なんか今、聞いてはならないことを聞いてしまった気がする。
「え！？い、今何て！？」
「だから、家から直接宅急便で寮に送ったんだよ」
ガーン！
「そ、その手があったとは…！！」
ショックに打ちのめされ、翔太は魂が抜けたようにがっくりと肩を落とす。
「お、おい！大丈夫か！？」
直矢は慌てて翔太の肩に手をかけ、その体を支えた。
「せっかく頑張って、ここまで運んできたのに…」
「翔太！？おい！しっかりしろ！」
直矢は、心配そうにこれから学友となる少年の体を前後に揺さぶった。
「遠かったのに…重かったのに…」
「翔太…」
「今までの僕の苦労は何だったんだぁ！！」
そんな翔太を嘲笑うかのように、二人を乗せた列車はポーッ！と大きく汽笛をあげ、山の奥へと走り続けるのであった。

その頃、北城学園では、ある一人の教師が理事長室に呼び出されていた。
「失礼します」
軽くノックして部屋に入る。
「いや～、二宮先生。入学式の準備やらで忙しい時にすまんな」
真っ先に目に入るのは、窓を背にした大きな机。そこに、人の良さそうな小太りの中年男がでんと構えている。
彼こそが、この北城学園の理事長だ。

気さくな人柄で、生徒達からの人気は上々ではあるが、時たま困った事をしでかすのが難点である。
「いえいえ、もう明日の準備もほぼ終わっていますので。それで、用というのは？」
こんな風に呼び出されるなんて、ろくな事がないと相場が決まっている。
北城学園の若き教師、二宮広康は覚悟を決めて、理事長の次の言葉を待った。
「実は、困った事になった」
やはり、嫌な予感は当たった。
こうなったら、その「困った事」の困った度合いができるだけ低いようにとひたすら願うだけだ。
「その、困った事というのは？」
「実は…」
「実は？」
「実は、合格基準に満たない生徒に、間違って合格通知書を送ってしまったんだよぉ」
そう言って、いい大人が今にも泣き出しそうな顔をする。
「えぇ？！」
驚愕の余り、思わず妙な声を出してしまった。
「一体どこをどうしたらそんなことになるんですか？！」
最悪だ。
理事長は今までにも数々の困った事をしでかしてきたが、これは相当困った度が高い。
もう、怒る気にもなれず、ただ呆れるばかりだ。
「いや～、先月ここで、願書を見ながら合格通知書を書いていたんだがな。そこに突然、小型ロケットが突風と共に、窓を突き破って入ってきて、」
合格通知書は校長が一枚一枚手で書くのが、この学校の伝統だった。
ちなみにここでは合格者の受験番号を校舎の玄関に貼り出したりは

しない。
なぜなら、全国各地に受験生がいる中で、こんな北海道の田舎の山奥などにわざわざ見に来る者など、ごく僅かだと思われるからだ。よって、受験生にとって合格通知書が来るか否かが、唯一の合否の判断となる。
「ちょっと待って下さい！小型ロケットって…！？いやそれより、何でそんな大事なことを黙ってたんですか！？」
「いや～、こんな寒い中、小型ロケットの打ち上げなんて、理科の勉強に熱心な生徒もいるもんだなぁって感心してしまってな」
「そんなのんきな…」
「という訳で、その時の衝撃で願書がごちゃごちゃになっちゃって、不合格者のものが紛れ込んでしまったと思われるのだ」
「……」
余りの出来事に、しばらく言葉を失った。
「ちなみに、その小型ロケットとやらを打ち上げていた生徒は？」
「さて、窓の外を見たのだが、それらしき者は誰もいなかった。どうやら逃げ足が早いらしいな」
そう言って、理事長は楽しげにハハハと笑っている。
まったく、笑っている場合ではないというのに。
「話はわかりました。それで、何故私をここに？」
ああ…嫌な予感をひしひしと感じる。
「実はその子なんだがな」
ごくり。
「二宮先生のクラスに入る事になったんだ」
嫌な予感的中！
「ええ？！ちょ、ちょっと待って下さい！そんな…」
「まぁ、一つよろしく頼むよ」
そう言いながら理事長は、一枚の書類を差し出す。そこには例の新入生と思われる少年の顔写真が貼ってあり、名前や生年月日等の個人情報が記されていた。

「この子が…」
「ああ、そうだよ。まさか、今更不合格だなんて言えるわけがない！今頃こちらに向かってるところだろうし…だから、どうか頼む！」
にも泣き出しそうな理事長の形相に、二宮はほとほと呆れながら、書類に目を通した。見たところ、特に目立つ所のないごく普通の少年だ。
だが、この時二宮の中で、ある一つの疑問が生まれていた。
「ところで理事長、」
「今年の新入生は、例年通り９０人ですよね？」
この学校は、一学年につき、３０人のクラスが三組という少人数教育だ。
「ああ、そうだが…」
「てことはですよ、」
「この子が入った分、本来ならば合格するはずだったのに、不合格になった子が一人いるということになるのでは…」
理事長の顔がみるみると青ざめていく。どうやら今気付いたらしい。
「二宮先生！」
「どうかこのことは内密に…」
「ですが、理事長。それだと合格するはずだった子が、あまりにも…」
「頼む！この通りだ！」
バンッ！と理事長は机に両手をついて、頭を下げた。
「今更、どうすることもできないんだ。ああ…もし、このことが知れたら、学校の信用に傷が付いてしまう！」
「理事長、解りました。ですから頭を上げて下さい」
「お願いだ！二宮先生！このことはくれぐれも内密に…！私と二宮先生の二人だけの秘密だ！いいな！」
学園の一教師という立場である以上、理事長に従うより他はなかった。
「長野翔太か…」

二宮は溜め息と共に、書類に記されている名前を読み上げた。

所変わって、ここは北城学園生徒会室。
春休みだというのに、カタカタとパソコンのキーボードを打つ音が部屋中に鳴り響いている。
「こ、これは…」
驚愕に満ちた声と共に、カタカタという音が止んだ。
「どうしたの？純。何か面白いものでも見つけた？」
窓辺に佇む一人の生徒が、先程から何やら真剣な面持ちでパソコンに向かっている友人にふわりと問いかける。
純と呼ばれた青年、藤堂純一郎の端正な横顔は完全に固まっていた。
窓辺の青年は、外から差し込む春の陽射しを背中に受け、そのふんわりとした色素の薄い髪を煌めかせながら、友人の元へと歩み寄る。
彼の名は森優樹。
彼こそがここ北城学園の生徒会長なのである。
「こ、これは、すごいものを見つけたぞ」
純一郎の、その知的な顔立ちによく似合う銀縁眼鏡がキラーンと光る。
「え？何？」
あくまでも柔らかな物腰で、優樹は自分と同じ紺色のブレザーを着た背中にしがみつくようにして、画面を覗き込んだ。
ふんわりと漂う甘い香りが、純一郎の鼻をくすぐる。
「北城学園マル秘文書（理事長専用）？！」
さほど大きな声を出した訳ではないのだが、二人しかいない室内にその声はよく通った。
「しーっ！声がでかい。学園のシステムにハッキングしてたら見つけたんだ」
「へぇ～やるじゃん。君のハッキング技術は日に日に進歩を遂げて

いくね」
そう言って優樹はそのアイドルのような甘いマスクをふんわりと綻ばせた。
甘く、優しげなその微笑みとは対照的に、誉めている内容は実にとんでもない事である。
「いやいや、それほどでもないよ。だってここのセキュリティ、ゆるゆるだぞ。こんなんで大丈夫なのかって、こっちが不安になってくる」
「君がよく言うよ。それより、早く開こうよ。久しぶりにわくわくしてきた」
「ああ、俺もだ」
そう言って純一郎はカチッとマウスをクリックして、画面を展開する。
「ふ～ん、合格基準に満たない受験生に誤って合格通知を送付ねぇ」
「長野翔太…か。ご丁寧に写真まで付いてるぞ」
「これは面白いことになってきたね」
「ああ、実に面白い。どうやら理事長はこの件に関しては徹底的に隠蔽するつもりらしいな」
そう言って二人は顔を見合わせてニヤリと笑った。
「ん？ねぇ、まだ続きがあるよ」
「え～と…何者かが理事長室に小型ロケットを打ち込んだせいで、書類がぐちゃぐちゃになっちゃった為…と書いてある」
「ねぇ純、気のせいかもしれないけど、その日、僕たち二人で小型ロケットの打ち上げ実験しなかったっけ？」
「ああ優樹、気のせいかもしれないが、しかもそのロケットが思わぬ方向へ飛んで行き、理事長室の窓に突撃しちゃって、慌てて逃げたような気がするんだが」
「……」
「……」
二人の表情が凍り付き、ようやく春休み中の生徒会室に静寂が訪れ

る。
「とりあえず、」
先に沈黙を打ち破ったのは優樹だった。
「問題を先送りにしよっか」
そう言って優樹はふんわりと微笑んだ。
見つめられたら溶けてしまいそうな甘い笑顔。みんなその笑顔に騙されるのだ。
「官僚か！とそこは突っ込みたい所だが…仕方がない。まぁとりあえず、様子見ってとこかな」
「うん、それがいいよ。そういえば、そろそろ新入生が寮に着く頃じゃない？」
二人は壁に掛かっている時計に目をやった。
「もうこんな時間か。じゃあ俺達も寮に戻るとするか」
入寮時の新入生の世話係は主に中学三年、高校一年にあたる、三、四年生に割り当てられている。
よって最上級生である二人には特段することもないのだが、やはりどんな子が自分の後輩となるのか、非常に気になるというものだ。
「どうやら長野君は、僕達の寮じゃないみたいだね」
「ああ、残念だな。でも、いずれ嫌でも顔を見る日が来るさ」
「うん、楽しみだね」
そう言って、二人の上級生は暢気に談笑しながら生徒会室を後にした。

「着いた―！やっと着いたぞ！」
翔太の元気なハイトーンボイスが響き渡る。
電車とバスを乗り継ぎ、さらに森の中を歩く事１５分。
翔太と直矢は、ようやく「北城学園」と書かれたやたら背が高い門の前に辿り着いた。

「話に聞いてはいたけど、すごいな」
「うん、お城みたいだね」
二人は目の前の大きな校舎を見上げ、息を飲んだ。それはまさに壮大な自然の中に佇む城だったのだ。
「それにしても、随分立派な門だな」
「僕たちの身長の二倍以上あるよ」
二人はしげしげと見渡しながら、その中世ヨーロッパ風の荘厳な造りの門を通り抜けた。
「ねぇ直矢、この学校って世間一般では『名門校』って言われてるんだよね」
翔太が急に真顔になって、直矢にこう尋ねる。
「そうだけど、それがどうかしたのか？」
「もしかしてさ…」
翔太は後ろを振り返り、今通ったばかりの校門をじっと見つめている。
直矢ははっと気が付いた。
彼もまた、同じことを考えたのだ。
「ま、まさか…そんなことって…」
「いや、僕もまさかとは思うんだけどさ。あまりにも立派だったから、つい」
「だよな。『名門校』てこっちのじゃないよな」
「うん、大丈夫だよね。だって入学試験難しかったし！」
「だよな！きっと校門以外にもいろいろ名門な学校なんだよ！うん！そういうことにしよう！」
二人は互いに言い聞かせ合った。
「そんなことより、クラス分け見に行こうよ」
そう言って翔太は直矢の手を掴み、ぐいぐいと引っ張って行く。
「わっ！わっ！ちょっと！」
繋いだ手の温もりが、なんだかちょっと心地良いなと直矢は思った。

校舎の玄関に張り出された組分け表。そこには新入生らしき少年達の人だかりができていた。
ちなみに一組の生徒は第一寮、二組の生徒は第二寮、三組の生徒は第三寮に入ることになっている。
つまり、このクラス分けによって六年間暮らす寮が決まってしまうのだ。
これはかなり重要である。
二人はそれぞれ自分の名前を見つけようと、目の前にずらりと並ぶ名前の群れに目を這わせた。
「あった！三組だ」
二人がそう呟いたのはほぼ同時だった。
「え！？」
びっくりして顔を見合わせる。
「すごい！同じクラスだよ！直矢！」
翔太は直矢の両手を取って、嬉しそうにぴょんぴょん跳びはねた。
「よ、よろしくな」
そう言って直矢は、その温かい手を遠慮がちに、だがしっかりと握り返した。

二人は入寮手続きをすべく、第三寮へと向かった。
第三寮の玄関をくぐると、受付と貼り紙されている長机に、上級生が三人程並んで座っているのが見える。
だが、そこに辿り着く前に、何やらとてつもなく存在感のある、大きな壁が立ちはだかっていた。
いや、壁ではない。
人だ。
身長１８０ｃｍ以上は余裕であると思われる、３０歳前後の大きな男がニカッと野生的な笑みを浮かべ、二人を見下ろしていたのだった。

「第三寮にようこそ！」
野太い声が頭上で響く。
身長１５０ｃｍ程の二人は、自然と上を見上げる形になる。
とその瞬間、ごつごつした大きな手で頭を掴まれた。
「俺はここの寮監の、広田豪だ。よろしくな！」
そう言うとその大男は、両手でそれぞれ二人の頭をわしゃわしゃと豪快に撫でた。
「よ、よろしくお願いします！」
「そうかそうか、よく来たな！これからいろいろあると思うが、気合いで乗り切れ！」
「気合いだー！」
そう言って、広田は二人の背中を受付の方へと押しやった。
「ふぅ、やっと解放された」
「なんかすごい先生だね」
受付に列びながら、二人はひそひそと小声で話した。
先に列んでいる少年達の頭もみんなぐしゃぐしゃになっている所を見ると、どうやらあれが寮に入るための洗礼らしい。
そうこうしているうちに翔太たちの順番が回ってきた。
「えーっと、長野翔太君に佐藤直矢君ね」
受付の上級生が名簿のような物を確認する。
「二人とも同じ部屋でいい？じゃあ５３号室ね」
答える隙も与えずに、にっこりと事務的な微笑みを浮かべて受付の彼はそう言った。そしてぽかんとしている二人をよそに、
「次の人どうぞ～」
と後に列んでいる人達に声をかけた。
半ば追い立てられるように、横へとずれる。
「やったぁ！同じ部屋だね、直矢！」
翔太が喜ぶ一方、直矢は難しい顔をしていた。
「うまい…うますぎる」
「え？何が？」

「だって、俺たち今日初めて電車の中で偶然出会って、一緒の学校でしかも一緒のクラスで、その上寮の部屋まで一緒だなんて、絶対話が上手過ぎるよ」
「うーん。言われてみれば、確かに…」
「あっ！べ、別におまえと一緒が嫌とかそういうわけじゃないからな」
「ねぇ、これってもしかして、運命！？」
翔太が目を輝かせながらそう言った。
「え！？う、運命って…おまえよくそんな恥ずかしいこと平気で言えるな」
直矢は頬を赤く染め、自分へと向けられているその黒目がちな目から逃れるように、目線をそらした。
「残念ながら、寮の部屋に関しては運命ではないよ」
聞き覚えのない声が、突然二人の会話に入り込む。
びっくりして振り返ると、そこに上級生と思われる一人の生徒が立っていた。
アシメントリーな前髪に、黒縁眼鏡。
なんというか、おしゃれな雰囲気を全身に漂わせている。
制服のネクタイは青系のストライプ。
北城学園の制服はどこにでもある紺のブレザーだが、ネクタイの色と柄が学年ごとに違うのが特徴的だ。
中学生に当たる一、二、三年生はチェック柄、高校生に当たる四、五、六年生はストライプ柄で、色は一年生と四年生が青系、二年生と五年生が緑系、三年生と六年生が赤系となっている。
よってネクタイを見ただけで学年がわかる仕組みなのだ。
察するに、どうやら彼は四年生らしい。腕には案内係と書かれた腕章がはめられていた。
「今年の部屋割りは着いた人から順にどんどん埋めていく方式だからね。だから二人で一緒に来た場合、同室になる確率は二分の一。しかもなんとなく仲良さそうな二人組だとほぼ間違いなく同室にさ

れる」
そう言って上級生は得意気にニヤリと笑った。
「えぇ!?そうなんですか!?」
翔太と直矢は驚きの声を上げた。
だって、こういう部屋割りというのは、普通学校側で予め決められているものだと思っていたから。
「なんかものすごく適当な気がするのは気のせいだろうか」
直矢が腑に落ちない顔でそう呟いたのを見て、先輩は説明を加えた。
「前は学校側で決めていたんだけど、不仲な者同士が同室になっちゃって、いろいろ問題が発生してさぁ。それ以来この方法になったんだ」
一体どんだけ仲悪かったんだ!?
二人は心の中でそう突っ込んだ。

三人は取り留めのない話をしながら、部屋へと歩みを進めた。
面倒見がよく、いい人そうな先輩だなと翔太は思った。
でも、何だろう?
さっきから、何か違和感を感じる。
だってこの先輩、ずっと直矢の方ばかり見てるのだ。
(でも、何で?直矢の顔に何か面白い物でも付いてるのかなあ?)
翔太は直矢の顔をまじまじと観察した。
二人分の尋常ならぬ視線を感じた直矢は、
(い、一体何なんだよ!)
と心の中で叫びながら、赤面して下を向いた。

そんなこんなしているうちに、一同は53号室と書かれたドアの前にたどり着いた。
「実は僕、美術部員なんだ。よかったら見学においで」
勿論それは二人に向けて発せられた台詞だった。
だが、彼の目は相変わらず直矢だけを追っていたのだった。

先輩に御礼を行って別れると、二人は扉を開けて中に入った。
簡素な造りのベッドと机が二人分、左右対象に置かれているのが目に入る。
「よーし、早速片付けるか！」
遂に例の大きなキャリーバッグが翔太によって開かれる時が来た。
「おい、何だよそれ」
直矢がそう突っ込んだのも無理はない。
キャリーバッグの中身のメインは大きなクマの縫いぐるみで、その隙間に着替えなどの日用品が無理矢理詰め込まれているという状態だったからだ。
「おまえ、まさか…」
「ち、違うんだ！べ、別にこれがないと眠れないとかそういうんじゃないんだからね！」
「ふーん」
「あ、信じてないだろ。実はこの縫いぐるみはね…」
翔太はまるで怪談話をするかのように、声のトーンを落とした。
「僕の分身なんだ」
「え？それってどういうこと？」
「このクマさんは、僕が赤ちゃんの頃から一緒にいるんだけどね、」
そう話しながら、翔太はペッタンコに潰れたクマをなんとか復元しようと、押したり引っ張ったりと悪戦苦闘していた。
だが、長時間狭い空間に押し込まれていたためか、なかなか元には戻らない。
「三歳の時、僕は肺炎にかかって苦しんだことがあるんだけど、その時、このクマさんの胸のリボンが取れているのをママが発見して直したんだ。そしたらその数日後、僕の肺炎も治ったらしい」
「それって偶然じゃないの？」
「いや、それだけじゃないんだ。幼稚園の頃、遊具から落ちて左手を怪我した時も、クマさんの左手が綻びて綿が出てたんだ」

翔太はついにクマさんを直すのを諦めて、ペッタンコなままベッドに置いた。
「あと、小学校の二年生の頃、サッカーで右足を捻挫したんだけど、その時もクマさんの右足がもげかかってたんだ。それと、五年生の時、水泳大会で溺れかけた時も、家に帰ったらママがクマさんを間違えて洗濯しちゃってたんだ」
「うわぁ…」
直矢は驚きの表情を見せた。
「お前って鈍臭いんだなぁ」
「いや！驚くところそこじゃないし！」
分身、か…
本当にそんなことがあるのだろうか？
翔太が嘘をついているようには思えないが、俄かには信じ難い話だ。
「まあそんな訳で、そばに置いておかないと落ち着かなくてさ」
翔太はクマさんの頭を軽く撫でると、立ち上がった。
「そうだ！直矢の荷物取りに行こうよ」
どうやら自分の荷物はあっという間に片付けてしまったようだ。
翔太がドアの方へと近付いた、その時だった。

バターン！！

「突撃ー！隣のお部屋ー！」
「ギャーッ！」
勢い良くドアが開き、元気な声と共に一人の少年が突然部屋に飛び込んできた。
と、同時に聞こえた翔太の悲鳴。
「翔太！？大丈夫か！？」
内開きのドアだったため、見事にドアと壁の間に挟まれてしまったのだ。
漫画だったらきっとペッタンコになっているに違いない…って、ん？

直矢ははっとしてベッドの上のクマの縫いぐるみに目を遣った。
可哀相なことに、相変わらずペッタンコに潰れたままである。
「そんな…まさか…」
サァーッと直矢の頭から血の気が引いて行く。
電車の中でのあの時、咄嗟の判断だったが、暴走するキャリーバッグを止めておいて本当に正解だった。
直矢は心の底からそう思った。
「ごめん！大丈夫？！」
突然の来訪者は、急いで翔太の元に駆け寄った。
「おい！しっかりしろ！」
ふらふらと足元が覚束なくなっている翔太を直矢が横から支える。
「う～ん…直…矢ぁ…」
「ん？」
「天使…」
「え？！」
「天使が見えるよ…」
朦朧とした意識の中で見えたもの―それはまさに天使だった。
てことは僕、死んじゃったのかなぁ…
「ねぇ、僕は死んじゃったの？」
そう言って目の前の天使に縋るように手を伸ばす。
「違う、その子は天使じゃないよ」
この時初めて、部屋への侵入者が一人ではなく二人だったということに、直矢は気付く。
天使の後ろに立っている見知らぬ少年のその言葉で、翔太ははたと我に還った。
意識がはっきりしてくるにつれて分かってきた。
天使だと思っていたのは、自分と同じ歳頃の人間の男の子だったのだ。
天使と見紛うのも無理はない。
外国の血が混じっているのだろうか。

茶髪というよりは金髪に近いふわふわとした柔らかい髪。
茶色のような緑のような色をした、吸い込まれそうな大きな瞳。
その愛らしい顔立ちは、まさに天使そのものだった。
「僕、隣の部屋の朝日光輝。さっきはごめんね。怪我はない？」
見かけとは裏腹にごく日本人的な名前である。
「う～ん…まあ、何とか。僕、長野翔太！」
「俺は佐藤直矢。おまえ、今度からノックくらいしろよ」
「ごめん、今度から気をつけるよ。これから先、よろしくね！」
「こちらこそよろしく！」
「よろしくな」
光輝は翔太、直矢とそれぞれ握手を交わした。
「そしてこっちが僕のルームメイトの富本知（とも）。トミーって呼んでね」
そう言って、光輝は自分の後ろに隠れるようにして立っているスラリとした少年を紹介した。
実は部屋に入ってきた時から、ずっと光輝の後ろにいたのだが、まるで空気と一体化してしまったかのように存在感がない。
「よ、よろしく…」
トミーと紹介されたその少年は、サラサラとした長めの前髪の隙間から、遠慮がちに瞳を覗かせながらこう言った。
騒がしいルームメイトとは対称的に、こちらは随分と大人しい。
「こちらこそよろしく！」
と翔太と直矢が言葉を返すと、知は黙って下を向いてしまった。
人見知りが激しいのだろうか。
長い前髪で隠され、どんな表情をしているのか全くわからない。
「トミーと僕は、小学校からの大親友なんだ」
光輝は得意げにそう言いながら、知の肩に腕を回し、自分の方へ引き寄せた。
「翔太と直矢も、小学校からの友達なの？」
「ううん、ついさっき電車の中で初めて会ったんだよ。ね、直矢」
「うん、さっき会ったばっかり」

大体、難関校のため、同じ小学校から二人も受かること自体珍しいのだ。
「ええ?!そうなの?!てっきり幼なじみか何かじゃないかと思ってた!」
光輝はその丸っこい不思議な色をした瞳を更に真ん丸にした。
「だって二人とも、波長がぴったり合ってるんだもん。まるで長い間一緒にいるみたい」
「そ、そうかなぁ」
翔太は照れたようにえへへと笑う。
「べ、別にそんなことないよ!」
とは言うものの、直矢の顔は真っ赤だったので、光輝はクスクスと笑った。
「ねぇ、話変わるけど、光輝って外国人なの?」
翔太のその問い掛けに、先程からずっと沈黙を通している知の目が鋭く光った。
(え?!何?!僕、何か悪いこと言った?!)
翔太は心の中でそう自問する。
「外国人だったら何かあるの?」
長い間閉ざされていた知の口が、久々に開いた。
「おまえ、その言い方はないんじゃないの?」
直矢が庇ってくれたのが、翔太はちょっと嬉しかった。
「いいよトミー、翔太は悪気があるわけじゃないよ、」
「気持ちは嬉しいけどね」
光輝がそう言うと、知は黙って唇を噛んだ。
「あの…僕は別に…」
「いいんだよ翔太、わかってる」
光輝は翔太の方を見て、話し始めた。
「僕、おじいちゃんがフランス人で、最近まで海外で暮らしてたんだ。そのせいで、小学校でいじめられてた時期があって…そんな時、知がいつも守ってくれたんだ。だから…」

「ごめん！僕そんなことがあったなんて知らなくて…僕はただ、光輝の目と髪が綺麗でカッコイイなぁって…」
「わぁ！翔太、そんな風に思ってくれたの！？」
ぱあぁっと光輝の顔が輝く。
「嬉しい！」
そう言って光輝は翔太に抱き着いた。
「え！？わっ！？」
まるで女の子に抱き着かれているような錯覚を覚え、翔太は戸惑う。
そんな様子を見て、知は光輝の袖を遠慮がちに引っ張った。
「光輝、そろそろ行かないか？寮の中探検するんだろ」
そして、翔太を見て、
「さっきはごめん…」
と小さく謝る。
「いいよいいよ。僕も悪かったし」
「じゃあ、また後でね」
知に腕を引かれながら、光輝はそう言って部屋を後にした。
シーンと部屋が静まり返る。
静かになった途端、疲労感がどっと二人に押し寄せた。

「はぁ～、いいお湯だった」
翔太は、ほかほかとした体をベッドに落とした。
夕食を食べ終え、お風呂から上がった二人は、ちょうど部屋でくつろいでいるところだ。
「何だか喉渇いたなぁ」
と翔太が呟く。
「うん、俺も」
隣のベッドに腰掛けた直矢は、風呂上がりの体の熱を持て余し、首

のあたりを手で扇いだ。
「そうだ！何か飲み物買いに行こうよ」
そう言って翔太は立ち上がると、ドアの方へと向かった。
時を同じくして、何やら部屋に向かって足音が近付いて来るのを直矢は感じた。
足音は速さを増し、カチャッとドアノブが回った瞬間、「デジャブ」という言葉が頭をよぎる。
「翔太、危ないっ！」
相変わらず鈍臭いやつ…って今はそんなこと思ってる場合ではない。
その瞬間、直矢は抱き抱えるようにして翔太を庇いながら、勢いよく迫ってくる、ドアと言う名の分厚い板を見事にかわした。
が、勢い余って、二人はそのまま床へと倒れ込む。
「こんばんは～！」
先程とは違う声。
バターンッ！と音をたて、ドアが壁に激しく打ち付けられる。
全くここの住人はノックするということを知らないのか。
「俺、隣の部屋の…わあああぁ！」
突然やってきた小柄な少年は、いきなり赤面すると、
「失礼しましたぁ！」
と言って瞬く間にいなくなってしまった。
「なんだあいつ…」
「さぁ、隣の部屋の、とか言ってたけど…」
おそらく光輝達とは反対隣の部屋の住人だろう。
取り残された翔太と直矢はただ、ポカーンとするしかなかった。

（うわぁ…いきなりとんでもないもの見ちまったよ）
少年は慌てて自室へと逃げ帰った。
隣の５３号室で見た光景が目に焼き付いて離れない。
彼が見たものとは、一人の美少年がそのルームメイトらしき少年を、今まさに押し倒しているところだった。

絡み合う肢体。
上気している肌。
乱れた呼吸。
男子校はホモが多い、というのは都市伝説かと思っていたが、まさか初日からあんな場面に出くわしてしまうとは…！
「うわあぁ！」
彼は悲鳴のような声を上げ、ベッドの上で手足をジタバタさせた。

「ねえ直矢、今隣からなんか聞こえなかった？」
「あぁ、きっと初めての寮生活にはしゃいでるんじゃない？まったくガキだな」
そう言う直矢も今、翔太との枕投げに熱中している真っ最中である。
自分の事を棚に上げるとは全くこの事だ。
こうして、級友に大きな誤解を与えたまま、二人の寮生活最初の夜は更けていくのであった。

第二話　後門の狼！？（前書き）

ちょっとお下品です。
ＢＬネタ苦手な方はご注意ください

第二話　後門の狼!?

入学式における理事長の話というものは、どうしてこうも長いのだろうか。
この会場にいるほとんどの人がそう思っているに違いない。
翔太は欠伸を押し殺すのに必死で、話の内容など二の次だった。

バターン!!

後ろの方で人が倒れる音がした。
これもお約束。
このような集会においては、貧血を起こして倒れる者が必ず一人か二人出てくるものだ。
倒れたのは新入生?それとも上級生?
会場がざわめき立つ。
「村崎先生!だからあれほどサプリメントだけで食事を済ますのはよくないって言ってるじゃないですか!」
教師と思われる若い男の声が聞こえる。
今の台詞から察するに、どうやら倒れたのは先生のようだ。
「う…大丈夫だ。科学的には、人間はサプリメントで必要な栄養素さえ摂取していれば、生きていけるはずなんだ」
「まだ言うんですか!ほら、医務室行きますよ!」
村崎先生と呼ばれた痩せ型の30代後半くらいの男は、二人の男性教師にそれぞれ頭と足を持たれて、会場の外へと運び出されていった。
「大丈夫かなぁ」
その様子を見ていた直矢は、翔太にそっと話し掛ける。
「大丈夫だよ、きっと。多分貧血か何かだろうし」
「いや、そうじゃなくてさ。この学校が、大丈夫かなぁって」

翔太は返す言葉が見つからなかった。
全くをもって直矢の言う通りだと思ったのだ。

少々ハプニングはあったが、その後入学式は滞りなく終わった。
会場となっている体育館を出て、校舎へと続く渡り廊下に差し掛かったときだった。
見覚えのある人物が壁にもたれて立っているのが目に入る。
「やぁ、直矢君！翔太君！」
昨日部屋まで案内してくれた、黒縁眼鏡の上級生である。
おそらく待ち伏せしていたのだろう。
親しげな微笑みを浮かべながら、彼は二人に歩み寄り、
「実は、直矢君に頼みたいことがあるんだ」
と切り出した。
「あの…なんですか？頼みたいことって」
「前に僕は美術部員だって言ったよね？実は、直矢君にモデルを頼みたいんだ」
「え？！」
直矢は戸惑いの表情を浮かべた。
正直、入学早々そんな面倒そうなことに関わりたくはなかった。
しかも、モデルだなんて柄じゃない。
美術部に入るつもりもないし…
だが、このような上下関係の厳しい男子校で、先輩からの誘いを無下に断るというのもなんだか気が進まないのである。
「わぁ！モデルだなんてすごいじゃん！」
直矢の気持ちとは裏腹に、翔太は嬉しそうにキラキラと目を輝かせた。
「あ、いや、俺はまだ…」
「僕、直矢がモデルになった作品見てみたいなぁ」
「…そ、そうか？」

翔太がそう言うなら…と一瞬気持ちが傾きかけた時だった。
「決まりだね。じゃあ、放課後美術室で待ってるから」
そんな直矢の心の隙をついたのか、見事先輩に押し切られてしまう。
「え!?ちょっと待っ…」
僅かな抵抗を試みるも、上級生はすでにひらひらと手をふりながら遠ざかって行ってしまった。
「はぁ…」
直矢はがっくりと肩を落とした。
もう、こうなってしまったら仕方がない。
下手に先輩に抗って人間関係を荒立てるよりも、ここは大人しく従った方が身の為だ。
モデルなんて、じっとしてるのが多少辛いくらいで別にたいしたことないだろう。
それに…
「わぁ、楽しみだなぁ」
そう言って隣で無邪気に顔を綻ばせている翔太の姿を見ていると、
「まぁいいか」という気持ちになっていくから不思議なものである。

「それでは、学級委員と会計委員を発表する」
教壇の上でそう言ったのは、一年三組の担任、二宮広康先生だ。
25歳前後の若い先生で、その爽やかな笑顔はテレビの教育番組に出ている体操のお兄さんを思い起こさせる。
ちなみに担当科目は数学と体育。
先生のその言葉を合図に、ざわざわと教室がざわめき立った。
入学式の後、新入生たちはそれぞれの教室に集められ、自己紹介などを行うのだが、中でもみんなが気になっているのは、学級委員と会計委員が誰なのかということだ。

なぜそんなに気になるのかというと、この二つの委員はあらかじめ学校側で決められているのだが、入試の成績がクラスで1番良い生徒が学級委員、二番目に良い生徒が会計委員に選ばれるというのが、暗黙の了解であるからだ。
なので、彼らにとってこれらに選ばれるということは、とても名誉なことなのである。
「まず、学級委員は五十嵐誠」
わあっと教室が湧き、拍手が上がる。
「ほら、前に出て」
先生にそう促されると、一人の少年が遠慮がちに立ち上がり、教壇の方へと歩み寄った。
いかにも優等生という感じで、その眼鏡がよく似合う顔立ちから、立ち居振る舞いまで、すべてにおいて育ちの良さが伺える。
「え一と次、会計委員は櫻井紘斗」
拍手に包まれながら、小柄な少年が前に出て、学級委員の隣にちょこんと立った。
「あっ！」
翔太は思わず声を発した。
その櫻井紘斗と呼ばれた少年は、まさに昨夜部屋にやってきたかと思うとすぐにいなくなってしまった少年と同一人物だったのだ。
向こうもそれに気付いたのか、翔太と目を合わせると、ニヤリと悪戯っぽく微笑んだ。

放課後になった途端、紘斗は翔太の机のところにやって来て、ひょいっと顔を近づけた。
「ねぇ、お前あいつとどこまでいってるの？」
いろんな方向に跳ねた髪の毛がぴょこんと揺れる。
「あいつ」と言った時の紘斗の目線の先には直矢の姿があった。
「え？どこまでって、なんのこと？」
「またぁ〜、ごまかさなくてもいいって」

そう言って、紘斗は翔太の背中をバシバシ叩く。
「もう、だから一体何の話？」
翔太は軽く咳込んだ。
「ちぇっ！なんだよケチ！」
紘斗が頬を膨らませる。
昨日の不可解な行動といい、翔太には紘斗の言動が全く理解出来ない。
「あっ！そうそう！」
思い出したかのように紘斗は言った。
「あいつ、可愛いって上級生の間で噂になってるから、気をつけた方がいいぞ」
「え？！」
昨日あの後、紘斗は悶々と思考を巡らし、一つの結論を導き出した。
そうか、この学校というのは、「そういうところ」なんだ。
ならば毒を食らわば皿までだ。
紘斗は早速上級生から、その手の情報を集めにかかったのだった。
環境に対する適応能力が高いのは、彼の長所の一つである。
「おい、おまえらさっきから何話してるんだ？」
ちらちらと向けられる二人の視線に、いい加減気付いた直矢が話に参戦する。
「あ！直矢！あのね…」
「いや！なんでもないんだ！」
何か言おうとした翔太の口を紘斗が慌てて塞ぐ。
「紘斗、そろそろ行かないと委員会に遅刻しちゃうよ」
そう言って近づいてきたのは、我等が学級委員長、五十嵐誠だ。
「本当だ！そろそろ行かないと！」
好都合と言わんばかりに紘斗は、
「じゃあまたな！」
と言葉を残すと、教室の出口の方へ向かって走って行った。
「話の途中でごめんね」

誠は翔太たちに向かって申し訳なさそうに謝ると、
「おい、ちょっと待ってよ」
と紘斗の後を追った。
「あっ！そうだ！」
ちょうど出口に差し掛かったところで、紘斗はくるっと振り返る。
「昨日言い忘れたけど、俺と委員長の部屋、お前らの隣だからよろしくな！」
「よろしくね」
紘斗の言葉を受け、誠もニコッと微笑んでそう言った。
「こちらこそよろしく…」
翔太たちが言い終わらないうちに、二人は慌ただしく教室を去って行った。
「そういえば、僕たちもそろそろ美術室に行った方がいいんじゃない？」
「ああ、そうだな」
憂鬱そうに直矢は溜息をつく。
そのまだあどけないが綺麗に整った横顔を見て、翔太は先程の紘斗の言葉を思い出した。
―あいつ、可愛いって上級生の間で噂になってるから、気をつけた方がいいぞ―
確かに、直矢は上級生から人気が出てもおかしくないとは思うけど、あまり男が男を可愛い可愛い言うのは、なんだか変な感じがした。
それに、一体何に気をつけろというのだろう。
そう疑問に思いながらも、美術室へと足を進めるのだった。

翔太と直矢は「美術室」と書かれたドアの前に辿り着いた。
「失礼します」
ドアをノックすると、すぐに

「は一い」
と声が聞こえ、扉が開く。
「ようこそ！よく来たね」
中から現れたのは、やはりあの黒縁眼鏡の四年生だ。
「お邪魔しま一す！」
翔太が中に入ろうとすると、
「ごめん、今日は部外者は立入禁止なんだ」
先輩がドアの前で行く手を阻んだ。
「え一！そうなんですか」
「うん、悪いけど、部員とモデルしか入れないんだ。翔太君はまたの機会においでよ、ね？」
そう言われたら、それに従うより他はない。
「はい…わかりました」
翔太はしょんぼりと肩を落とす。
「あ～あ、直矢がモデルやってるとこ見たかったなぁ」
「べ、別にいいよ！そんなの見なくても。じゃ、またあとでな」
そうは言っているが、直矢はどこか不安げな色を浮かべていた。
（直矢、一人で大丈夫かなぁ）
翔太がそう思っていると、それが直矢に伝わったのか、「大丈夫」と言っているかのように、翔太の目を見て軽く頷いた。
そして、先輩に連れられ、美術室の中へと消えて行ったのだった。
ただ一人、翔太だけがその場に取り残される。
（本当に大丈夫かなぁ）
美術室に入る時浮かべていた直矢の不安げな顔が、なんだか目に焼き付いて離れない。
それに、先程紘斗が言っていたことも、心のどこかで引っ掛かっていた。
押し寄せる漠然とした不安感に、翔太はどうしてよいか分からず、ただ美術室の前を行ったり来たりしていた。
と、その時だった。

「よっ！少年！こんなところで何やってんだ？」
聞き覚えのある野太い声が頭上で響く。
見上げると、寮監の広田豪の姿がそこにあった。
「広田先生！」
「どうしたんだ？そんな顔して」
「いえ、別にたいしたことじゃないんです」
「なんだなんだ、悩みがあるなら俺に相談してみろ」
そう言って広田先生は、翔太の頭をわしゃわしゃと撫でる。
「あの…」
「いいから、なんでも言ってみな」
「実は…」
翔太は今までの出来事を話した。
「なるほどねぇ…ま、そういう時は、気合いで乗り切れ！気合いだ気合い！」
先程ぐしゃぐしゃにされた髪の毛がようやくサラサラと戻りかけていたところで、再びそのゴツゴツとした手によって揉みくちゃにされる。
「は、はい…」
もしかして、この人はなんでも気合いで解決させるのだろうか？
一抹の疑問を抱きながらも、翔太はすっかりその勢いに圧倒されてしまっていた。
「ただ、これだけは言っておく」
すると広田先生は急にその大きな体を屈めて、翔太の耳元で囁くようにこう言った。
「肛門だけは死守しろよ」
それは、いつもの野性的な声とは違い、思わずドキッとしてしまう程、低くハスキーな声だった。
「え！？こうもん？」
「おっといけない！また二宮先生に、子供に変な事吹きこむなって怒られちまう」

「あの…先生！こうもんって…」
「そんじゃあ気合いで頑張れよ！少年！」
それだけ言うと、広田先生は廊下の向こうへと歩いて行ってしまった。
「う～ん…こうもん…こうもん」
翔太は首を捻って考え込む。
と、その時、翔太の頭にある事が思い浮かんだ。
「『こうもん』ってまさか…！」
こうしちゃいられない。
翔太はものすごい勢いで、その場を走り去って行った。

生徒会の用事で外出した帰り道、あともう少しで学園に到着するというところだった。
森優樹と藤堂純一郎は、校門の前に誰か立っているということに気付く。
「純、あれ…」
「ああ…」
近づくにつれてわかってきた。
どうやらそれは新入生らしいのだが、どうしたことか、強張った顔をして箒を持って身構えている。
それにしても、どこかで見たことのある顔だなと二人は思った。
調度その少年のいるところまで近づいた時、優樹はハッと気付いた。
「君！長野翔太君だよね？」
そう、そこにいたのは昨日盗み見た理事長専用マル秘文書に載っていた写真の少年だったのだ。
「は、はい！そうですけど…」
いきなり上級生に話しかけられ、翔太は動揺した。
タイは赤系のストライプ―ということは、どうやら最上級生のよう

だ。
あれ？この人、たしか入学式で…
「あー！生徒会長！」
思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。
そうだ、入学式で生徒会長として挨拶していた人だ。
この人が壇上に立った瞬間、会場の空気がやたらキラキラし出したことが印象に残っている。
「ふふ、覚えていてくれたんだね。僕は森優樹。そしてこっちが会計の藤堂純一郎」
そう言って優樹はふんわりと微笑む。
「よろしく」
純一郎と紹介された背の高い六年生は、その端正な顔によく似合う銀縁眼鏡を、指で押し上げながらそう言った。
「よ、よろしくお願いします！でも、どうして僕の名前を知ってるんですか？」
ぎくっ！
優樹は一瞬たじろいだが、すぐにいつもの甘ったるい微笑を浮かべた。
「だって生徒会長だもん。新入生の顔と名前くらい頭に入ってて当然だよ」
そう言いつつも、そんなの嘘だとすぐばれるのではないか、内心ドキドキしていた。
が、
「わぁ！生徒会長ってすごいんですね！」
と翔太は優樹に尊敬の眼差しを向けた。
単純な子でよかったと二人は胸を撫で下ろす。
「ところで、翔太はこんなところで何やってるの？」
深く突っ込まれる前に、優樹は核心に迫る。
「校門を死守してるんです！」
「え？！校門を？！なんでまた？」

「実は…」
翔太は今までの出来事を説明した。
「ひょっとして、その美術部員って折田隆史のことじゃないのか？」
翔太が話し終わるや否や、純一郎がそう言った。
「うん、そんなことする人、彼くらいしか思い浮かばないね」
優樹もそれに頷き、それから翔太にこう訊いた。
「ねえ、その先輩って左右非対称な個性的な髪型で、個性的な黒縁眼鏡を掛けてなかった？」
「は、はい！まさにその通りです！」
すると、優樹と純一郎は互いに顔を見合わせて、「やっぱり」と言うように頷いた。
「翔太、たぶんその四年生は折田隆史っていう生徒だと思うんだけどね、実は彼、変わった趣味を持っているんだ」
優樹のその言葉に、純一郎がさらに付け足す。
「折田はな、『美少年拓』をとって収集するのが趣味なんだ」
「え！？びしょうねんたく？それって何ですか？」
「まあ要するにだな、魚拓って何だかわかるか？」
「えっと…よく、釣った魚に墨を塗って紙に写しとるあれですよね？」
「そう、それの人間版ってところだな」
「えぇっ？！」
純一郎の説明に、翔太は全身に墨を塗りたくられ、紙を押し付けられる直矢の姿を想像した。
「…嫌だ！そんなの嫌過ぎる！」
「そうそう、自分好みの可愛い子を何かと理由つけて美術室に連れ込むんだよね。今まで何人もの生徒が被害に遭ってきたことか…」
優樹は呆れたように言った。
「特に今の時期は、何も知らない新入生が毎年餌食になるのさ。まったく困ったやつだよ」
純一郎はそう言って溜息をつく。

「でも、それなら何で広田先生は『校門を死守しろ』って言ったんだろう」
いろいろな事が明らかになった今、翔太は先生のその言葉に違和感を覚えた。
「ああ、それはね、広田先生が言ってた『こうもん』っていうのは、その校門のことじゃなくて、その…」
優樹がその先を言うのをためらっていると、純一郎は淡々と言い放った。
「『こうもん』ていうのは、お尻の穴の方の肛門のことだ」
「ええ?!てことは…」
翔太の幼い顔が青ざめていく。
「お!案外察しがいいんだな」
純粋な下級生に、その先のことを教えるのは、いくら純一郎でも気が引けてしまう。
だから、翔太が自分で察してくれて助かったと思ったのだ。
が、しかし…
「嫌だ!入学記念に肛門スタンプなんて絶対嫌に決まってる!」
「いや違う!そうじゃなくて…」
純一郎は勘違いを正そうとしたのだが、
「直矢―っ!」
翔太はそう叫びながら、校舎の方に走って行ってしまった。
「あ~あ、行っちゃった。どうする?純」
「仕方ない。俺達も行くか」
「うん、何だかおもしろそうだしね」
二人は翔太の後を追って走った。

「…やっ、先輩っ!ダメ…そこは…っ」
扉の向こうから、くすぐったそうな直矢の声と、ピチャピチャとし

た水音が聞こえてくる。
「直矢ぁぁっ！」
翔太は勢いよく美術室のドアを開け放った。
「翔太！？」そこで翔太が見た光景―それは、椅子に縛り付けられ足の裏に墨を塗りたくられている直矢の姿だった。
無理矢理脱がされたと思われる靴と靴下が辺りに散らばっている。
「直矢！肛門は無事！？」
翔太は直矢のもとに駆け寄った。
「え？こうもんって？」
直矢はきょとんと聞き返す。
「ちょっと待て！人聞きの悪いこと言うなよ！僕はただ、この子の足形をとろうとしただけで…」
黒縁眼鏡の先輩は、墨だらけの筆を振り回しながら、必死で弁明する。
「え？足形？」
その時、翔太は背後に人の気配を感じた。
「下級生を縛りつけておいて、人聞きもなにもないだろ」
「と、藤堂先輩！」
黒縁眼鏡の四年生はそう言った拍子に、ボタリと筆を取り落とす。
翔太が振り返ると、そこには先程の二人の六年生の姿があった。
「翔太、こいつは折田隆史といってな、美少年の足形を集めるのが趣味なんだ」
純一郎は、黒縁眼鏡の四年生に目を向けながら言う。
「まぁ、要するに変態だね」
優樹も苦笑を浮かべてそう言った。
「そう、このスベスベとした白く、可愛らしい足……！あぁ…いずれ大きくなってしまうのだろう……だからその前に、今のこの成長途中の美しい姿を残しておきたくて僕は…」
折田隆史は墨がつくのも構わずに、直矢の足を頬にスリスリと擦り寄せながら、なにやら譫言のようなことを言っている。

どうやら完全に自己陶酔モードに入ってしまったようだ。
「ひぃっ！やめろ！」
直矢は嫌そうに顔をしかめたが、椅子に縛り付けられているため、逃げることもできない。
「でも、それなら結局、『肛門』てなんのことだったんですか？」
変態は無視して翔太は訊いた。
「えっと……それは……」
優樹と純一郎が困ったように顔を見合わせていると、
「そんなことより早く助けてくれ！」
と直矢の悲痛な声が上がる。
「わ！？直矢！？今助けるからね！」
翔太は急いで直矢の縄を解き、優樹と純一郎と協力して折田を引きはがした。
「はぁ…酷い目に遭った。絵か何かのモデルかと思ったのに、まさかこんなことになるとは…」
直矢はぐったりとうなだれる。
「大丈夫？怪我とかない？」
翔太は心配そうに直矢の顔を覗き込んだ。
「まあ、なんとかな。翔太、あのさ…」
「ん？」
「あの…その……ありがと、な」
消え入るような声でそう言うと、直矢は頬を赤く染め、目線をそらした。
「え？」
「…翔太が助けに来てくれて、すごく嬉しかった」
真っ赤な顔で、はにかむようにそんなことを言われると、翔太は嬉しいような恥ずかしいような不思議な気持ちになった。
「当然だろ！だって僕たち友達だもん！」
そう言って翔太は直矢の頭をわしゃわしゃと撫でる。
「わっ！何するんだよ！」

「広田先生の真似―」
「やったな、このっ！」
直矢はやり返そうとするが、翔太が素早くそれをよける。
「きゃははっ！」
「あ！待て―っ！」
仲良く追いかけっこをする二人の下級生の姿を優樹と純一郎は微笑ましそうに見ていた。
「ふふふ、実にいいねぇ、あの子。僕、気に入っちゃったよ」
優樹がそう言うと、純一郎は少し複雑そうな表情をした。
「問題は、この学校の授業についていけるかだな。落第でもしようものなら、学校から追い出すいい口実になる」
「ああ、そうだね…」
優樹は急に真面目な顔になると、しばらく黙り込んだ。
そして、決心したようにこう言った。
「よ～し決めた！僕、全力であの子を応援するよ」
「え？」
純一郎は少し驚いたように優樹を見た。
「僕の目が黒いうちは、絶対あの子を退学になんてさせない！」
「ふ～ん、おまえが後輩にそこまで入れ込むなんて珍しいな」
「そうかな？でも、こんなことになったのも、元はと言えば僕たちにも原因はあるんだし…」
「ああ、認めたくないけど、そうなんだよな」
そう言って、純一郎は険しい表情を浮かべ、翔太を目で追った。
一方、折田隆史はというと、床についた直矢の足跡を見つめて恍惚としているのであった。

第三話　ついに始まる学校生活

中学校と小学校との違いはいくつかあるが、その大きなものの一つとして、英語の授業があるかないかが挙げられる。
初めての英語の授業を前に、一年三組の少年達も期待と不安に胸を膨らませていた。
「英語の先生ってどんな人かなぁ」
「もしかして、金髪美女の外人さんかも！」
「男子校にそんな人来るか？」
「じゃあさ、ブラット・ピットみたいな男の先生とか？」
「わぁ、いいねそれ！」
そんな会話が飛び交う中、教室の戸がガラッと開く。
一同はゴクリと息をのんだ。
「グッドモ～ニングクラス！」
それは見事なまでの「おじいちゃん英語」だった。
その声と共に登場したのはやはり、どう見ても７０過ぎの小柄なおじいさんだ。
「なぁ、先生の定年って６０歳だよな？」
直矢は隣に座る翔太に小声で話しかけた。
「うん、たしかそうだったと思うけど…」
がっかりとした空気が教室中に漂う。
「マイネームイズ、ヒデオスギモト」
やはり老人が話すような英語でそう言うと、先生は「杉本秀夫」と自分の名前を黒板に書いた。
そして更に、
「アイムフィフテーシックスイヤーズオールド」
そう言って「５６歳」とその横に書く。
その瞬間、教室にどよめきが起こった。
（５６歳！？うそだろ！？）

教室の誰もがそう思ったに違いない。
翔太と直矢は驚いたように顔を見合わせた。
「レッツスタディーイングリッシュ！」
そんな教室の空気に気付いていないのか、気付いていても気にしないのか。
杉本先生は、ほのぼのとした笑顔でそう言うと、授業を始めた。
（なんだろう…なんかこの先生、癒される…！）
授業を受けていると、翔太はなんだかぽわ～んとした気分になっていくのを感じた。
そしていつの間にか、教室中がほのぼのとした空気で包まれていくのであった。

英語の次は体育の授業だった。
グラウンドに集まった体操服の少年たちは、先程習ったばかりの英語の歌を口ずさんでいる。
「えーびーすぃーでーいーえふじぃ」
英語を習い始めた者であれば誰もが歌うであろう、キラキラ星のメロディーに乗せたあの歌だ。
だが、少年達のその発音は、見事に「おじいちゃん英語」と化していた。
「おいおい、なんだよその発音は！まるでおじいちゃんじゃないか！」
「あ！二宮先生！」
少年の一人がそう声を上げる。
体育担当は、担任の二宮先生だ。
「そういえば、英語担当は杉本先生だったな」
二宮は、杉本先生が英語教師のくせに常日頃から「T」を「テー」、「D」を「デー」と発音しているのを思い出した。

「これはまずい…これはまずいぞ！」
ある程度基礎が固まっている上の学年ならともかく、初めて英語を習う一年生にこの先生を充てるのは危険すぎる。
現に「おじいちゃん英語」が伝染ってしまっているではないか。
「先生、どうしたんですか？」頭を抱え込んでいる二宮を何人かの生徒が心配そうに覗き込む。
「そうだ！」
二宮は思いついたように顔を上げた。
「光輝！おまえ帰国子女だったよな？」
「はい！去年の８月までヨーロッパにいました！」
「頼む！こいつらに正しい英語の発音を教えてやってくれないか」
「でも僕、イギリスには住んだことないんですけど…」
「いいからいいから！今の発音よりは絶対マシだから！」
「えっと、じゃあ…、アー（Ａ）、ベー（Ｂ）、ツェー（Ｃ）！」
光輝が笑顔でそう言うと、みんなもその後について発音する。
「アーベーツェー！」
「ちょっと待て！それはドイツ語じゃないのか！？」
二宮は慌てて止める。
「あれ？そうだっけ？え～と、じゃあ…」
「わかった！もういい！俺が悪かった」
どうやら本当に英語が話せないらしい。
とりあえずこの問題は保留にして、と…
「ってあーっ！もうこんな時間！ほら！準備体操始めるからとっとと整列しろ！」
危うく自分の授業時間が潰れるところだった。
失われた時間を取り戻すべく、二宮は焦って授業を進めた。

今日の体育の授業は体力テストだった。
年度の最初に行う、持久力とか瞬発力とかを測るあれである。

腹筋、背筋、握力、反復横跳び……
授業は何事もなく進んでいくと思われた。
だがしかし、問題はハンドボール投げの時に発生した。
「翔太～、いくらなんでも７ｍはないだろ！中１男子の平均は１９ｍだぞ」
先生にそう言われ、翔太は決まり悪そうに肩をすくめた。
「だって…どうしても飛ばなくて…」
「こうやって膝を少し曲げて、肘はこうで、体重を移動させるようにこう投げるんだ！」
先生はお手本を見せる。
「ほら！もう一回やってみろ！」
「はい！」
元気よく返事をすると、翔太は先生の真似をしようと試みた。
「えっと…こうやって、こうやって…えいっ！」
「うわぁっ！？」
力いっぱい投げたボールが、鈍い音をたてて先生の顔面を直撃する。
「ご、ごめんなさい！」
「もういい！おまえは今日の放課後残って練習だ！」
「え～っ！？そ、そんな…」
二宮は、翔太がこの学校の授業についていけないのではないかと心配してはいた。
だが、まさか体育の授業でつまづくとは、想定外だった。
「一人じゃ無理だろうから…直矢！悪いが、こいつに付き合ってやってくれないか？」
「えぇ！？なんで俺が！？」
「それはおまえのハンドボール投げの成績がクラスで三位だからだ。それにおまえ翔太のルームメイトだろ？」
翔太が目を潤ませて直矢の方を見る。
「はぁ～、しょうがないな」
直矢は深い溜息を落とした。

「付き合わせちゃってごめんね」
「もういいから、とっとと終わらせて帰るぞ！」
放課後、翔太は先生に言われた通り、グラウンドの片隅でハンドボール投げの練習をしていた。
だが、一向に上達する気配はない。
「どうすれば、うまく投げられるんだろう…」
翔太はボールを構えながら、最良の投球フォームを模索する。
「う〜ん、腰の捻り方がよくないんじゃない？ほら、もっとこうして…」
そう言って、直矢は翔太の腰をグイッと掴む。
「あ…っ！やっ…きゃはは！直矢…っ！くすぐったい！」
翔太は思いっきり身をよじった。
すると次の瞬間、
「あ…！」
ボールはポーンと翔太の手を離れ、あらぬ方向へと飛んで行ってしまった。
「一体どこ行っちゃったんだろう」
翔太は辺りを見回したが、ボールの姿は見当たらない。
とその時、翔太は遠くの方から、何やら悲鳴のような声が聞こえるのを感じた。
「ねぇ直矢、今なんかあっちから悲鳴みたいな声が聞こえなかった？」
「え？気のせいじゃないの？それよりあのボールはもう諦めて、予備の使わないか？」
そう言って直矢は
「ほら、さっさと終わらせるぞ」
と予備のボールを翔太に投げ渡した。
「う〜ん…気のせい、だよね…」

悲鳴のことが気になってはいたが、付き合ってもらっている直矢のためにも、早くこの練習を終わらせることの方が先決だった。
「うん！気のせい気のせい！」
そう自分に言い聞かせながら、翔太はひたすらハンドボールを投げ続けるのであった。

「あ～あ、すっかり遅くなっちゃった！」
「おい！早くしないと入浴時間に間に合わないぞ！」
「あ～！直矢待ってよ！」
二人は風呂場に向かって全力で走った。
結局あの後、夕日が沈み、暗くなってもさらに練習を続け、ようやく１ｍ記録を伸ばすことができたのだった。
「げっ！もう閉まってる…」
先に到着した直矢は、浴室の戸に「本日の入浴時間は終了しました」という札が掛かっているのを見て愕然とした。
「そんなぁ…」
翔太も直矢の後ろで落胆の声を上げる。
ここ北城学園の寮では、規則によって入浴時間が決められており、その時間に入れなかった者は、備え付けのコインシャワーを利用することになっているのだ。
「５分百円か…」
シャワールームの前で直矢は溜息混じりに呟いた。
「お金取るなんてひどいよ～」
シャワー５分で百円は、中学生にとっては痛い出費だ。
シャワーが有料なのは、おそらく寮生に入浴時間を守らせるための学校側の作戦だろう。
「はぁ～、仕方ないよな…」
直矢が諦めたように言ったその時、
「そうだ！いいこと思い付いた！」

翔太は突然ひらめいた。
「え？何？いいことって」
「二人一緒に入っちゃえばいいんだよ！」
「はぁ！？お前何言って…」
「そしたらお金半分で済むよ！」
翔太はいかにも素晴らしいことを思い付いたかのように、自慢げに鼻を鳴らす。
「でも、二人一緒にって…あの中にか？！」
コインシャワーの個室は、大人一人が入って少し狭苦しいと感じるくらいだ。
平均的な中学一年生の子供が二人、入れないことはないが、かなり窮屈になるだろう。
だが、お金が半分で済むというのは魅力的である。
「ほら、早く行こうよー！」
そう言って翔太は直矢の腕を引っ張る。
「え！？わ！？ちょっ！？」
こうして二人は服を脱ぎ、コインシャワーの個室に入った。
「やっぱり結構狭いね」
自分で言い出したにも関わらず、翔太は困惑した。
個室の中は肌と肌が触れ合う狭さだ。
それに、一緒にシャワーを浴びる為には、かなり密着しなければならない。
翔太にとって、他人の体温をこんなに近くで感じるなんて、記憶に残っている限りでは初めてのことだった。
いくら男同士とはいえ、なんだか変な気分になってしまう。
二人は身体の密着している部分から、お互い心臓の鼓動が高鳴っていることを感じ合い、さらにドキドキするという悪循環に陥った。
なんとも言えない気まずい空気が流れる。
「そうだ！洗い合いっこしようよ！」
この空気を打ち破ろうと、翔太は先程から顔を赤らめ、目を合わせ

ようとしない直矢に向かってそう言った。
「わっ！？ちょっと待て！」
有無を言わさず、翔太は直矢の頭にシャンプーを振り掛け泡立てる。
「あはは！泡だらけ～！」
友人の頭を見て、翔太は楽しそうに笑う。
「この～、やったな！」
今度は直矢が仕返しする番だ。
あまり見せたことのない悪戯っぽい微笑みを浮かべると、直矢は翔太の頭をここぞとばかりにゴシゴシ洗った。
サラサラとした細い髪が、指に絡まる。
「わぁ！きゃはっ！痛いっ！直矢痛いよ！もうちょっと優しくして！」
「あっ！悪い」
そう言って直矢が手を離すと同時に、翔太も顔を上げ、目と目が合う。
「ぷっ！」
二人は同時に吹き出した。
「きゃははは！何その頭！きゃはは！」
「翔太こそ何だよその頭！きゃはは！」
先程までの気まずい空気はどこへ行ったのやら。
二人は泡だらけになったお互いの頭を見て、盛大に笑い合った。
「よ～し、次は身体だな」
「うん！」
調子づいた二人は互いの身体を洗い合おうとした、が、
「あはっ！ちょっ…あっ！や…っ！翔太っ！くすぐったいっ！」
「直矢の方こそ…あっ！きゃはっ！くすぐった…あはは！」
一度くすぐったいと意識してしまうと、敏感になって余計くすぐったく感じてしまうのは何故だろう。
もはや「洗い合いっこ」というよりは、「くすぐり合いっこ」になってしまっている。

二人は泡まみれで無邪気にじゃれ合っていた。
が、つぎの瞬間、
「わあっ！？」
二人は足を滑らせ、もつれ合うようにして床に尻餅をつく。
「おいっ！そこで何やってるんだ？！」
ドアの向こうから上級生のものらしき声が聞こえる。
「わっ！逃げろ～！」
二人はなぜか後ろめたい気持ちになり、泡を流すのもそこそこに、個室を飛び出した。
「わあっ！？」
一つの個室から下級生が二人飛び出してきたのを見て、上級生はぎょっとする。
「な、なんなんだ！？あいつら」
彼は逃げるようにして脱衣所の方へと走っていく二人を、呆気にとられて見送るのだった。

次の日の昼休み、翔太と直矢、そして光輝が知の机の周りに集まって、談笑している時のことだった。
「トミー、どうしたの？なんか元気ないよ」
光輝は心配そうに知の顔を覗き込む。
翔太と直矢には、どこがいつもと違うのか、わからなかった。
知はいつも心ここにあらずといった感じで、何を考えているのかまったく読み取れないのだ。
宇宙人と興信しているのではないかと早くもクラスで噂になっている。
「うん…実は…」
知は俯きながら、ぼそり、ぼそりとゆっくりと話し始めた。
知が唯一心を開いている相手――親友でルームメイトである光輝に

向かって――

「昨日から、園芸部の部長の機嫌がすごく悪いんだ」

「そういえばトミーは園芸部だっけ？」

翔太が訊くと、知はコクリと小さく頷く。

知が興味を示す事柄といえば、翔太の知る範囲では、光輝に関する事、そして花に関する事、この二点だけである。

「部長って田中先輩のことだよね？機嫌が悪いってどうしてまた？」

光輝が問い掛ける。

「うん…昨日の放課後、先輩が大事に育てていた盆栽が、何者かによって割られたんだ」

「盆栽って何？」

そう言って光輝は首を傾げた。

まだ日本に来て日が浅いので、そういう日本的な物について、よく知らないのだ。

「こういう小さな松とかの鉢植えのことだよ」

知は紙にイラストを描いて説明した。

「わぁ、日本っぽくて風流だね！」

光輝はにこにこしながら、知が書いた松の盆栽のイラストを眺める。

「で、犯人は分かったのか？」

直矢が話の軌道を修正する。

「それが…その盆栽、花壇の横の棚に飾ってあったんだけど、先輩が花壇の手入れをしていたら、いきなりグラウンドの方からかハンドボールが飛んできて、ガシャーン！って…」

「えっ？！」

翔太と直矢はお互いに顔を見合わせ、青くなった。

「ねぇ直矢、それってもしかして…」

「ああ、間違いないよ…」

どんどん血の気がひいていく二人を見て、普段は伏し目がちな知の瞳が珍しく大きく開かれた。

「もしかして…君たち…」

「ごめんなさいっ！」
二人は頭を下げて謝った。
「まずいよ！絶対まずいよ！先輩かんかんに怒ってて、犯人見つけたらとっちめてやるって息巻いてたよ！」
いつもおとなしい知がここまで取り乱すとは、余程の事態とみえる。
そしてさらに最悪なことが明らかとなった。
「まさかとは思うけど、その田中先輩って去年柔道の全国大会に出場したっていう、あの田中大介先輩のことではないよな？」
直矢が恐る恐る尋ねる。
「うん…残念ながらそのまさかだよ。彼、柔道部と兼部してるんだ」
「げっ！それってめちゃくちゃまずいんじゃ…」
田中大介のことは、そういった情報に疎い翔太でも多少は知っていた。
北城学園五年二組。
柔道部のエースで、去年全国大会に出場している。
その高校生とは思えない鍛えぬかれた肉体は、縦にも横にもでかく、捕まったらひとたまりもないだろう。
「人生終わったな…」
諦めたように直矢が呟く。
「もうっ！あの時直矢が変なとこ触るから…！」
「え？なに？変なとこって？」
光輝が好奇心で目を輝かせる。
「ば、ばかっ！誤解されるようなこと言うな！俺はただ、ボールの投げ方を教えようと腰を触っただけだ！おまえこそ、いつもは全然飛ばないくせに、なんでこういう時に限って飛ばすんだよ！」
「手取り足取り腰取り…」
「わあ、その日本語どういう意味？」
「わっ！トミー！変なこと教えるな！って俺もよくわからないけど」
「どうしよう…一体どうしたらいいんだろう…」

絶望感に苛まれている翔太を見て、光輝は少し考え込むと、思い付いたように言った。
「そうだ！それと同じ物を同じ場所に置いておけばいいんじゃない？」
「あっ！それいい考えだね！」
翔太の顔が明るくなる。
「でも、盆栽なんてどうやって用意するんだ？買うと高いだろうし…」
直矢の言葉に、一同は「う～ん」と首を捻って考え込んだ。
「そうだ！いいものがあるんだ！」
光輝は何か思い付いたように、ポンッと手を叩いてそう言うと、
「ちょっと待ってて！」
と言ってどこかにいなくなってしまった。
「お待たせ！」
光輝はすぐに何かを持って戻って来ると、
「じゃーん！」
と言って手に持っている物を得意気に差し出す。
「紙粘土…？」
三人は不思議そうな顔をした。
そこにあったのは、美術の授業などで使う何の変哲もない紙粘土だったのだ。
「うん！これで盆栽を作っちゃえばいいんだよ！」
「そうか！光輝って頭いい！よ～し、早速作るぞ～！」
そう言って翔太は張り切って紙粘土に手を伸ばす。
みんなが見守る中、格闘すること数分。
翔太はようやく、
「出来たー！」
と声をあげた。
「おい…何だよこれ」
直矢は苦虫を噛みつぶしような顔をした。

「キノコ？」
光輝がきょとんとした顔で訊くと、
「キノコ…だね」
と知が呟く。
どう見ても、それはエリンギのような椎茸のようなキノコが一本、植木鉢から生えているという代物だった。
「えぇ～！結構うまくできたと思ったのに」
「もう少し枝別れさせた方がいいんじゃない？ほら、貸してみろ！」
そう言って、直矢は翔太の作った紙粘土の鉢植えに手を加える。
「これでどうだ！」
キノコの軸から数本のキノコが生えた。
「う～ん…」
一同は微妙な表情だ。
「ねぇねぇ、僕にもやらせて！」
今度は光輝がさらに手を加える。
「うっ…こ、これは…」
出来上がった作品を見て、三人は顔を歪める。
「ごめーん！なんかグロテスクになっちゃった！」
そこにあったのは、一本のキノコの軸から数本のキノコが生え、さらにそのキノコから、何本かのキノコが生えているという、なんとも気持ちが悪い鉢植えだった。
「ちょっと間引いた方がいいんじゃない？これじゃあ、キノコ多過ぎるよ」
そう言って知がまたさらに手を加える。
「こんな感じ…かな？」
さすがは園芸部員だ。
密集していたキノコの塊が、すっきりとバランスよく間引かれている。
「おおっ！」
と歓声が上がった。

「結構いいんじゃない？トミーすごい！」
「まあ、俺達の力じゃこれが限界ってとこだな。ありがとな、トミー」
「さすがトミーだね！親友として誇りに思うよ」
みんなに口々に褒められ、知は無言のまま頬を赤く染める。
だが、四人は気付いていなかった。
いくらバランスよくまとまっているとはいえ、所詮それはキノコの域を出ていないということに…
「後は乾かすだけか。どこに置こう？」
直矢は辺りを見回す。
「やっぱ窓辺じゃない？」
と光輝が言ったが、
「だめだよ！そんな目立つとこじゃ、見つかっちゃうよ」
と翔太が反対する。
「う～ん、じゃあここは？」
そう言って光輝が扉を開いたのは、教室の掃除用具入れだった。
「うん！ここなら見つからないね！」
今度は翔太も賛成した。
「上の段のバケツの陰に置けば完璧だな」
直矢もそう言って頷く。
四人は協力して、紙粘土の「盆栽」を掃除用具入れの中に隠すように置いた。
とその時、次の授業の予鈴がなる。
「わ！次音楽だよ！急がなきゃ！」
光輝はバタバタと教科書を取りに自分の席に戻り、他の三人もそれに倣う。
「早く行かなきゃ遅れちゃう！」
翔太は急いで机の中から教科書を引っ張り出した。
音楽室は離れの校舎にあって、移動するのに時間がかかるのだ。
「急げ～！」

そう言って四人は慌ただしく教室を後にした。

それから数日経ったある日の放課後――

「そろそろいいかな～」

そう言いながら、翔太は掃除用具入れの扉を開け、直矢、光輝、知と協力して紙粘土の「盆栽」を取り出した。

その瞬間、どこかで嗅いだ事のある嫌な臭いがもわっと漂う。

「うわっ！」

四人は口々に悲鳴のような声をあげた。

案の定、先日みんなで苦労して作った紙粘土の「盆栽」には、見事なカビが生えていたのだ。

「う……こ、これは……」

直矢は顔をしかめ、机に置かれたカビまみれの「盆栽」から一歩退く。

「気持ち悪いよ～」

翔太と光輝は手を取り合って泣きそうな顔をした。

「ここ数日、雨が続いたから……」

知も心持ち後ずさり、そう呟いた。

「で、でもさ、これ見方によっては、より本物に近くない？ほら、この緑のふわふわ具合とか！」

翔太は無理矢理笑顔を作りながら、紙粘土の青カビを指差して言う。

「だ、だよな！翔太の言う通りだ！」

直矢も顔を強張らせ、口の端を上げた。

「うん！色塗っちゃえばわかんないよ！」

そう言って、光輝はあらかじめ用意してあったカラースプレーを持ってくる。

知はそんな三人の様子をただ無言で見つめていた。

その日、田中大介はいつものように、花壇の手入れをする為、校庭へとやって来た。
すると、植木鉢等が置かれている花壇の横の飾り棚に、何やら見慣れないものが置いてある事に気付く。
「な！？なんなんだ！？これは…！？」
そこにあったのは、キノコの群集のような形をした、カビまみれの紙粘土の塊だった。
そのあまりの気持ち悪さに、しばらく口を開けたまま固まってしまう。
（これは、何かの嫌がらせだろうか？
お気に入りの盆栽は割られ、その傷が癒えないうちに、この仕打ち……一体俺が何をしたっていうんだ？！）
田中大介は、大きな体を震わせ、涙を零した。
そんな彼の様子を茂みの陰から窺う人影が二つ。
「よかった！先輩泣く程喜んでるよ！」
「これで俺達の学校生活は安泰だな」
「うん！本当によかった！」
翔太と直矢は手に手を取って喜んだ。
が、次の瞬間、
「誰だ！そこにいるのは！」
園芸用のスコップが飛んで来る。
「ひぃっ！」
「お～ま～え～ら～」
田中先輩が、広い肩を怒らせ、鬼のような形相で迫って来る。
「わー！ごめんなさい！」
二人は猛ダッシュで逃げる。
「こらー！待ちやがれ！」
「てか、何で俺まで？！」

こうして翔太と直矢の、田中先輩から逃げ回る日々が始まったのであった。

第四話　洋風美少年ＶＳ和風美少年！？

ある日の昼休みのことだった。
「い―ち、に―い、さ―ん、よ―ん……」
翔太は教室の入口近くの壁に顔を向け、腕で目を塞ぎ、数を数えていた。
みんなで隠れんぼをしていて、今は翔太が鬼になる番なのだ。
「もういいか～い？」
教室に向かって呼びかけるが、返事はない。
つまり、もう隠れ終わったということだ。
「よ―し！探すぞぉ！」
翔太がそう意気込んだ時、
「ねぇ、君、」
突如後ろから声をかけられる。
振り返ると、そこには見慣れない少年が立っていた。
真っ直ぐな艶のある黒髪に真っ黒な瞳、白い肌、紅を差したかのような真っ赤な唇。
その少女のような可憐な顔立ちは、差し詰め和風美少年とでも言った所だろうか。
初対面の生徒と出会ったら、まずタイの色と柄で学年を確認する――それはこの学校で生活していく上での基本中の基本である。
タイは緑のチェック柄――ということは、二年生か。
「朝日光輝って子いる？」
彼は、すました態度でそう尋ねた。
翔太はぐるりと教室を見渡したが、光輝の姿は見当らない。
それもそのはず、ただ今隠れんぼの真っ最中なのだから。
「すみません、僕たち今隠れんぼをしていて、これから探すところなんです。あ！直矢見～っけ！」
そう言いながら、翔太は教卓の下に隠れている直矢を見つける。

「あ〜あ、うまく隠れたと思ったのに…」
「君！佐藤直矢君だね！」
教卓の下から這い出る直矢に向かって、その二年生は言った。
「は、はい、そうですけど…」
見知らぬ先輩にいきなり話しかけられ、直矢は少し驚いた。
「君、一部の上級生による『可愛い後輩ランキング』で三位だったそうじゃないか！おめでとう！」
「は、はぁ…」
「ま、二位はこの僕だけどね」
そう言って彼は自慢気に、ふふんと鼻を鳴らした。
「ねぇ直矢、『可愛い後輩ランキング』て何？」
「さぁ…」
「そして、第一位は…君！」
その二年生は、教室の隅を指で差して言った。
「朝日光輝！」
その指の先にあったもの――それは、背中を丸くして、床にうずくまっている光輝の姿だった。
「あっ！光輝見〜つけ！」
「えへへ、見つかっちゃった」
光輝がムクリと起き上がる。
「先輩すごいですね！僕全然わからなかった」
翔太が感心して言うと、
「いや、これを見つけられないって君、相当観察力がないんだね」
と呆れたように、彼は返す。
「うん、俺もそう思う」
直矢もそれに頷いた。
他の生徒ならともかく、光輝のその茶色のような金色のようなふわふわとした頭は、とにかく目立つ。
そんな子が教室でうずくまっていたら、一目瞭然のはずだ。
「てゆうか、これより先に見つかっちゃった俺って、隠れんぼの才

能がないんだろうか…」
直矢は少し複雑そうな顔をした。
「ってそんなことより、朝日光輝！」
そう言ってその二年生は、再び光輝をビシッと指差す。
「僕と勝負だ！」
「え？勝負？」
光輝はきょとんとした顔で聞き返す。
「僕は、二年一組の神崎紫音。君が入学してくるまでは、毎回僕が一位だったんだ！一体僕のどこが君より劣ってるというんだ？！」
その二年生――神崎紫音は、そうまくし立てる。
「性格…じゃない？」
「しぃっ！直矢！」
翔太と直矢が事の成り行きを見守る中、光輝が口を開いた。
「う～ん、よく解らないけど、日本男児たるもの、申し込まれた勝負、受けて立とう！」
光輝はど～んと胸を叩く。
（あ～あ、受けて立っちゃった！）
翔太と直矢は心の中でそう叫んだ。
「ところで、勝負って何の勝負をするんですか？」
光輝がわくわくした様子で尋ねると、
「えっ？！そ、それはだな…え～っと……」
神崎紫音は、明らかにうろたえている様子だった。
どうやら何も考えていなかったらしい。
「そうだ！ちょっとこっちに来てくれない？」
そう言って、紫音は光輝を教室から連れ出す。
すると、どこからともなく知が現れ、その後を追う。
「トミー！一体どこに隠れてたの？」
さらにその後を直矢と共に追い掛けながら、翔太が訊くと、
「秘密」
と知は小さく答えた。

やがて、一同は学校の裏庭へと行き着く。
ある場所まで来ると、紫音は足を止め、後ろからぞろぞろと続く後輩達の方にくるりと向き直った。
「ここに、一つの荒れ果てた花壇がある」
紫音は取り澄ました顔で、目の前の小さな花壇に手を向ける。
花壇と言っても、まだ雪が解けたばかりで、クロッカスの花が数本咲いているのを除けば、雑草がまばらに生えているだけであった。
土の上には枯れた茎葉が雑然と散らばっていて、春休み中誰も手入れしていなかったのが見てとれる。
「一つの荒れ果てた花壇、ってこれ、先輩のクラスの学級花壇じゃないですか！」
直矢がすかさず突っ込んだ。
裏庭には一年生から六年生までの各クラスの学級花壇がずらりと整列していて、翔太たちが立っているのは、ちょうど「２－１」と書かれた立て札の前だったのである。
「まぁ、細かい事は気にするな。この花壇の雑草をどちらが多くむしり取ることができるか、それを勝負しよう！」
そう言って、紫音は光輝に挑戦的な眼差しを向ける。
「よ～し、負けないぞぉ！」
光輝は笑顔でその申し出を受け、腕まくりをする。
「じゃあ、始めるよ！よ～い、スタート！」
紫音の号令により、戦いの火蓋はついに切られた。
黙々と草むしりをする二人の様子を、直矢は怪訝な表情で見つめて言った。
「てか、これって一体何の勝負なんだ？！」
同意を求めて、翔太と知に目線を移すが、
「光輝－！頑張れ－！」

「頑張って、光輝……」
二人とも何の疑念もなく、光輝のことを応援している。
「なんで誰も突っ込まないんだよぉ！」
そんな直矢の嘆きを他所に、着実に花壇の雑草は減っていく。
二人は無言で手を動かし続け、ちょうど半分くらいの草が無くなった時だった。
「あっ！やばっ！」
突然、紫音が小さな叫び声を上げた。
手には根っこの付いたクロッカスが握られている。
勝負に没頭する余り、誤って引っこ抜いてしまったのである。
すると、
「その花…今日の朝咲いたばかりなのに……」
それを見ていた知の目から、見る見るうちに涙が溢れ出す。
これにはさすがの紫音も面食らい、
「ごめん！僕が悪かった！」
と勝負を中断させて知に駆け寄る。
「トミー？！大丈夫？！」
光輝も心配そうな顔をして駆け付けるが、知の目からは次から次へと大粒の涙がボロボロ零れ落ちる。
「あー！後輩泣かせていけないんだー」
「いけないんだー」
口々にそう言う翔太と直矢に対し、紫音は、
「違う！わざとじゃないんだ！」
と言い訳すると、知の方に向き直り、赤子をあやすかのように宥める。
「本当にごめん！謝るから泣かないで」
だが、知の涙は一向に収まる気配を見せない。
一方、光輝はただひたすら、「よしよし」と知の頭を撫で続けていた。
そんなこんなで混乱するさなか、一同に呼びかける声があった。

「お一い！どうかしたのか？」
翔太は声の方へと振り返る。
するとそこには、偶然通り掛かったと思われる櫻井紘斗の姿があった。
一年三組の学級委員長、五十嵐誠も一緒だ。
「あっ！」
同時に上がった二人分の叫び声。
それは誠と紫音のものだった。
「誠！？」
「紫音……先輩」
二人は互いに顔を合わせるや否や、目を丸くして見つめ合う。
「え！？委員長、先輩と知り合いなの？」
そんな二人を交互に見ながら翔太が訊くと、誠が答える前に紫音が口を開く。
「委員長って誠、こいつらと同じ第三寮なの？」
「う、うん…」
「てゆうか、入学したならしたって、何で教えてくれなかったんだよぉ！」
紫音は目を潤ませ、上目使いで誠を見つめてそう言った。
その声はひどく甘ったるく、先程までの翔太たちへの高圧的な態度とは偉い違いだ。
「ごめん、紫音……先輩。いろいろと忙しくて……」
誠は紫音の視線から逃れるように、目を泳がせる　。
「紫音でいいよ！僕と誠の仲だろう？」
そう言って、紫音は誠の腕に抱きついた。
「紫音……ちょっと！」
誠は戸惑いの声を上げる。
その表情からは、明らかに困っているということが見てとれた。
だが、紫音はそんなのお構いなしにしゃべり続ける。
「中学入ってから誠に会えなくて、ずっと寂しかったのに…！何で

一緒の寮をじゃないんだよ！ねぇ、こいつらなんかとじゃなくて、僕と一緒に第一寮に住もうよぉ！」

紫音は小さな子が駄々をこねるようにそう言う。

「そんなこと言ったって、学校で決められてるんだから、仕方ないだろう？」

誠は困り果てた様子で、無茶苦茶なことを言う紫音を宥める。

全く、どっちが年上なのだかわからない。

身長だって、二年生にしては小柄な紫音より、誠の方が上である。

わがままな先輩に、すっかり閉口してしまっている誠を、紘斗はついに見兼ねた。

「知り合いだか何だか知らないけど、誠は一年三組の学級委員長、つまり俺たちのものですから！」

そう言い放ち、紘斗は誠の空いている方の腕を掴んだ。

「いや、紘斗、それちょっと違…」

誠はそう言い掛けたが、すぐに紫音のキーキーとした声で掻き消される。

「何言ってんだ！一年坊主！僕と誠は生まれた時からずっと友達なんだ！君たちなんかに渡すもんか！」

紫音は誠の腕を引っ張り、自分の方へとしっかり引き寄せた。

「ふふん！でも今は俺が誠のルームメイトだもんね！」

紘斗も負けじと引っ張り返す。

「なに～！誠は僕のものだ！」

「俺のものだ！」

右へ左へと身体を引っ張られ、誠はどうしていいのかわからず、オロオロと途方に暮れている。

他の四人は、どうすることもできず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

目の前で起きている出来事のインパクトの強さに、知の涙もいつの間にか止まっていた。

「僕のだ！」

「俺のだ！」

しばらく続いたせめぎ合いの末、紫音はようやく誠の腕を放し、紘斗と対峙してこう言い放った。
「よし！僕と勝負だ！」
紫音の対抗意識の矛先は、今や完全に光輝から紘斗へと移っていた。鋭い視線を送ってくる紫音に負けるまいと、紘斗は小さな身体を闘争心でいっぱいにして答える。
「望むところだ！」
二人の間にバチバチと火花が飛び散る。
きつく絡み付いていた紘斗の腕も、誠の腕から離れていき、誠は晴れて自由の身となった。
へなへなとその場に座り込む誠を他所に、紫音と紘斗は互いに敵対心をメラメラと燃やしながら、目の前の花壇の雑草をむしり始める。
「だから、何で草むしりなんだよ～！」
直矢の声が昼下がりの校庭に虚しく響いた。
するとその時、
「お～い！紫音～！」
そう呼び掛ける声が聞こえたかと思うと、紫音の友人と思わしき二年生が一同の元へ走って来る。
「っておまえ、何後輩に手伝わせてるんだよ！」
彼は花壇の前に着くなり、紫音に非難の眼差しを向けた。
「ぎくっ！」
紫音が狼狽の色を露にする。
「手伝わせてるって、どういうことですか？」
翔太が尋ねると、その二年生は呆れたようにこう答えた。
「紫音のやつ、宿題忘れた罰として、学級花壇の草むしりをするようにって先生に言われたんだ。なのに、一年生に手伝わせるなんて、ひどいよなぁ」
それを聞いた一年生たちは、
「え～っ！？」
と驚きと怒りと呆れが入り交じった声を上げる。

「ひどいじゃないですか！先輩！」
「そーだそーだ」
翔太と紘斗が口々に言った。
「光輝、おまえも何か言ってやれよ」
直矢は、当事者なのに怒っている様子を全く見せない光輝に向かってそう言ったが、
「僕は楽しかったから別にいいや」
と彼はアハハと笑いながら答えた。
「おまえなぁ～」
直矢は呆れたように溜め息をつく。
知はただひたすら、ジト～ッと紫音に白い目を向けている。
後輩達からの集中砲火を浴び、紫音は決まり悪そうに口をつぐんでそっぽを向いていた。
そんな紫音の腕を引っ張りながら、その二年生は言った。
「こいつが迷惑かけてすまなかったな。ほら、紫音も謝れよ！」
そう言われ、紫音は仕方ないといった様子で、
「草むしりの事は、悪かったな…」
と小さな声で謝ると、紘斗を指差し、こう言い放った。
「でも、おまえにだけは絶対負けないからな！」
すると、彼の友人らしきその二年生は、
「ほら、行くよ！もうすぐ授業が始まっちゃう」
そう言いながら、今にも紘斗に噛み付かんとしている紫音をズルズルと引きずった。
「誠は僕のものだからな～！」
負け犬の遠吠えよろしくそう言いながら、紫音は友人に引きずられて行った。
紘斗はベーッ！と舌を出してそれを見送る。
後に残された、その何とも言えない混沌とした空気に、昼休みの終わりを告げる鐘の音が染み渡った。

放課後、学校の裏庭も夕焼け色に染まり行く頃。
この時間帯になると、学級花壇が並ぶだけの裏庭には、ほとんど人がいなくなる。
そんな中、知はただ一人、昼休みに戦場と化した二年一組の学級花壇にしゃがみこんでいた。
「かわいそうに…」
そう呟きながら、昼間紫音に引っこ抜かれたクロッカスの花を土の中に植え直す。
とその時、何やら背後に人の気配を感じた。
「光輝？」
思わず、口の中で小さくその名を呼んで、後ろを振り返る。
一瞬、光輝かと思った。
が、そこに立っていたのは、全くの別人である。
「光輝じゃなくてごめんね」
エヘヘと申し訳なさそうに笑ったのは、最近行動を共にすることが多くなった長野翔太だった。
恥ずかしさのため、知は頬を赤くして俯いた。
長めの前髪のおかげか、はたまた夕日のおかげか、翔太はそんなことには全く気付いていないようだ。
「ねぇ、この花、また綺麗に咲くかなぁ」
先程、知によって植え直されてはいたが、力無く頭を垂らしているクロッカスを見つめながら、翔太は知の隣にしゃがみ込んだ。
「うん、きっとまた綺麗に咲くよ」
そう言って、知はクロッカスの花を優しく撫でる。
知は、隣で心配そうに花を眺めるこのクラスメートのことが、どこか気に入らなかった。
どうしてだろう？
出会ったばかりの頃ならわかる。

光輝のこと、外国人だなんて言うから、嫌なやつだと思ったんだ。
この学校に入る前、光輝はそれが原因でよくいじめられていたのだ。
だから、あの時は少し過剰反応してしまった。
それは自分でも少し反省している。
すぐに、自分や光輝に危害を加えるような人ではないとわかったはずだ。
同じ教室で勉強し、同じ寮で生活していくにつれ、尚更それははっきりしてきた。
決して悪い人ではない。
なのに、なぜか気に食わないのだ。
「他のクラスの花壇も手入れしちゃうなんて、トミーって偉いなぁ！僕、尊敬しちゃうよ」
そう言って、翔太は知に屈託のない笑顔を向ける。
そうだ、そうやって素直に人を褒めるところとかが気に食わないのだ。
――僕はただ、光輝の目と髪が綺麗でカッコイイなぁって――
初めて会った時の翔太の言葉を思い出す。
自分だって、光輝のこと、ずっと同じように思っていた。
でも、そんな恥ずかしい事、言えるわけがない。
だのに、初対面にも関わらず、無邪気な顔でさらっとそんなこと言っちゃうなんて、ずるいよ……
「花に、罪はないから…」
知は、俯いて小さな声でそう答えた。
憎しみの対象となる人ではないとはっきりわかっている。
なのに、この憎悪にも似た感情は一体なんだろう？
こんな気持ちになったのは、たぶん生まれて初めてだ。
「ねぇ、僕にも何か手伝えることない？」
知がそんな気持ちになっているとは露知らず、翔太はそのあどけない顔をふにゃっとほころばせて訊いた。
そうだ、そうやっていつの間にか、ずけずけと人の心に入り込んで

来るのだ。
「じゃあ…ええっと…この肥料をここにまいて」
知は平常通り、淡々とそう言ったが、心の中では叫んでいた。
――ああ、これ以上こっちに入って来ないで――
――でないと、何だかおかしくなっちゃうよ――
するとその時、二人を呼ぶ声がした。
「お～い！トミー！翔太ー！」
常日頃から馴れ親しんでいる声――光輝の声だ。
振り返ると、光輝が少し離れた所から手を振っているのが目に入る。
佐藤直矢も一緒だ。
「そろそろ夕食に行かないか」
直矢がそう呼び掛けると、
「うん！今行く！」
と翔太は明るい声で返事をして立ち上がり、知に手を差し延べた。
「トミーも一緒に行こ！」
そう言って彼はにっこり笑う。
でも、知は何だかその手を取りたくなかった。
「先に行ってて、僕はまだ、ここにいるから…」
実際には、花壇の手入れは大方終わっていた。
だけど、自分でも理由はわからないけど、どうしてもその手を取りたくなかったのだ。
「う、うん…じゃ、先に行くね」
翔太は自分だけ先に行くのは悪いと思っているのか、少し申し訳なさそうな顔をしてそう言うと、光輝達の元へ駆けて行った。
まったくお人好しなやつだ。
知がそう思っていると、突然光輝が「あっ！」と声を上げ、
「僕、トミーと一緒にもう少しここにいるね。先行ってて」
そう言うと、ちょうど翔太と入れ違いになる形で、知の方へと駆け寄る。
「じゃ、またあとでな」

「あんまり遅くならないようにね」
翔太と直矢は手を振りながら去って行き、裏庭にいるのは光輝と知の二人だけになった。
すると、
「トミー、最近翔太の方ばっかり見てるよね」
そう言って、光輝は知の隣にしゃがみ込む。
「トミーが他人に興味を持つなんて珍しいから、僕、妬いちゃうなぁ」
冗談めかして言ってはいたが、その顔はどこか淋しそうだった。
まさかそんなことを言われるなんて思ってもみなかったので、知は少し驚いた。
大体、翔太と仲良くしているのは光輝の方じゃないか。
「そんなこと、ないよ」
そうは言ったが、しかし、この時知は気付いてしまった。
翔太のことが、羨ましいのだ。
自分も光輝に対して、あんな風に素直に接することができたらいいのにと、ずっと羨ましく思っていたのだ。
そして、これは認めたくないけれど、彼のことをどこか好ましいと思っている自分がいるのだ。
気に入らないと思ったのは、好意の裏返しだったのだ。
確かに、自分にしては珍しく他人に興味を持っているということには間違いなかった。
たぶん、他人に興味を持つのは、人生で二度目。
一度目は、もちろん光輝に対してだ。
小さい頃から、他人にあまり興味がなく、一人でいることが多かった。
周りの人達は心配してくれたが、興味のないものはどうしようもない。
別に淋しいとも思わなかった。
花があれば、それでよかった。

だが、光輝との出会いが人生を変えた。
光輝は、友達と接する事の楽しさ、友情の素晴らしさを教えてくれたのだ。
この学校に入る前は、自分と光輝に敵意ならいざ知らず、好意をぶつけてくる者などいなかった。
光輝は、小6の九月という中途半端な時期の転校生、外国育ち、その日本人離れした容姿から、いじめの標的となっていたし、自分はすでにクラスで孤立していたからだ。
お互いにお互いしか友達はなく、ずっと二人で寄り添うように学校生活を送ってきた。
だから、光輝や自分に真っ直ぐに好意をぶつけてくる翔太に対し、羨望、嫉妬、そして好意――今まで体感したことのない感情に囚われ、どうしていいかわからなくなってしまうのだ。
でも、以前も今も変わらないことが一つある。
それは――
「僕の一番の友達は、光輝だよ！だから、妬く必要なんて全くないよ」
知は珍しくはっきりとした声でそう言った。
光輝はそんな知の態度に驚いたのか、大きな目をパチクリさせる。
「ほんと？」
「うん……」
今頃になって自分の言ったことが恥ずかしくなってきて、知は頬を赤らめ俯いた。
そして、
「光輝の方こそ、最近翔太や直矢と仲良いじゃないか」
といじけたように言った。
光輝だって自分なんかより、いつも明るく素直な翔太の方がいいに決まってる。
知がそう思っていると、
「もしかして、妬いてくれてるの？」

光輝が知の顔を覗き込むようにして訊く。
知が赤面したまま無言でコクンと頷くと、
「嬉しい！」
そう言って光輝は知に抱き着いた。
その勢いで、知の細い体は傾き、土の上に尻餅をつく。
光輝は、そのまま知の肩に手を載せ、真っ直ぐ向き合った。
「確かに、翔太と直矢は大切な友達だけど、トミーは別格だよ！だってトミーは、日本に来て最初にできた友達だし、今までずっと二人だけで生きてきたじゃん！僕だって、トミーが一番の友達だよ！」
そう言うと、光輝は天使のようにふんわりと微笑んだ。
ああ、光輝も同じ様に思ってくれていたんだ。
そう思うと嬉しくて、知もはにかむような笑顔を浮かべる。
沈みかけの夕日が、見つめ合う二人を橙色に染め上げた。
「そろそろ帰ろっか」
光輝は立ち上がり、知の手を掴んで助け起こす。
「うん」
掴まれた手が、何だか温かいなと知は感じた。
二人が去った後の綺麗に手入れされた花壇には、クロッカスの花が二本、仲良く寄り添うように咲いていた。

第五話　友情

「うわあぁぁ―！」

日曜日、隣の部屋からのけたたましい叫び声により、翔太は目を覚ました。

今日はこの学校に入学して初めての外出日。

普段は特別な用事がない限り、学校の外に出ることは許されていないので、生徒達はこの日を心待ちにしているのである。

翔太も直矢と一緒に学校近くの町まで出掛ける予定であり、今日という日をずっと前から楽しみにしていた。

眠い目を擦りながら枕元の時計を見ると、針は午前6時を回った所だ。

起きるにはちょっと早いが、隣の部屋が騒がしくて眠れそうにない。

翔太は欠伸をしながら身を起こし、隣のベッドに目を遣ると、ちょうど直矢も目を覚ました所だった。

「う～ん……日曜日だってのに、こんな朝早くから何なんだよ」

眠そうな声でそう言いながら、直矢はもぞもぞと布団の中で体を動かし、起き上がる。

どうやら彼もまた、先程の叫び声に起こされた口らしい。

「委員長たちの部屋だよね。どうしたんだろう？」

翔太は、ギャ―ギャ―と声が聞こえて来る壁の方に、目を向ける。

「ちょっと様子見てくるか」

そう直矢が提案すると、翔太もそれに頷き、二人はパジャマのまま廊下に出た。

朝の空気がひんやりと肌寒く、翔太は思わず身震いする。

「お～い、入るぞ～！」

そう言って、直矢はゆっくりと隣の52号室のドアノブを回す。

「だから～、出てって下さいって言ってるじゃないですか！」ドアを開けるや否や、紘斗の声が二人の耳をつんざく。

見ると、紘斗が誠のベッドに向かって立ち、何やら言い争っているようだ。
「紘斗、どうしたの？…ってわぁ！？」
翔太と直矢は驚きの声を上げた。
部屋に入ってよく見ると、誠のベッドには、もう一人、人が寝ているのだ。
「げ！神崎先輩！？」
二人はそう同時に声を発した。
なんと、誠の隣に寝ていたのは、あの二年一組の神崎紫音だったのだ。
「翔太、直矢、聞いてくれよ！」
翔太達の方を向くと、紘斗は憤慨した様子でまくし立てる。
「さっき起きたら、いつの間にか神崎先輩が委員長の隣で寝てるんだ！出てけっつっても出てかなくてさぁ」
そう言って彼はムスッとして、誠のベッドへと視線を移す。
「ふん！誰が出て行くもんか！誠が第一寮に来れないなら、僕がここで誠と一緒に暮らすんだ！」
紫音は、絶対に出て行く気はないと言わんばかりに、掛け布団を肩まで引っ張り上げる。
その隣で、奇跡的にまだ眠っている誠は、ウンウンうなされていた。
どうやら悪い夢でも見ているらしい。
「はぁ！？何言ってるんですか！ここは、俺と委員長の部屋なんです！先輩はとっとと巣に帰って下さい！」
「なに～！チビのくせに！」
「あ～！禁句を言ったな～！」
二人は火花を散らして睨み合う。
「誠は僕のものだ！」
「違う！俺のものだ！」
言い争いは激しさを増していく。
「あの…二人とも、喧嘩は…」

翔太が止めに入ろうとしたが、直矢がそれを制した。
「やめとけ、無駄だ」
確かに、こうなったらもうどうしようもない。
そう思い、翔太は諦めた。
と、その時、
「う～ん……」
ようやく誠が目を覚ましたようだ。
こんな状況の中、今まで眠っていることができたなんて、さすが学級委員長の器なだけある。
「うわあぁぁ?!」
そう叫ぶと誠は飛び起きた。
まぁ、当然の反応である。
いるはずのない人物が、隣で寝ているのだから。
「あ、おはよう、誠!」
何事もなかったかのように、にっこりと微笑みながら、紫音も体を起こす。
「し、紫音…?!なんでここに?!」
寝ぼけ眼をパチクリさせながら、誠が訊く。
翔太と直矢はともかく、第一寮の紫音がここにいるのは明らかにおかしい。
「何だか知らんけど、気付いたらいたんだよ!なぁ、委員長もなんか言ってやれよ!」
紘斗が憤然と、ベッドの二人を見下ろす。
「うるさいな一」
紫音は紘斗を睨むと、コロッと態度を１８０度変え、
「ねぇ誠～、僕、誠と一緒にここで暮らすんだ」
そう甘えたような声で言い、誠の腕に抱き着いた。
「え!?ちょっ!?それは無理だよ!だって紫音は第一寮だろ?勝手に寮を抜け出したりしたら、怒られるよ!」
誠はオロオロと困惑して言った。

「も〜う、誠ったら照れちゃって！可愛いなぁ〜」
「いや、僕は真面目に…」
その時、紘斗の中で何かが切れた。
「あ〜もう！出てけったら出てけ！」
そう言うと、紘斗は布団の中の紫音の足を引っ張り、ベッドから引きずり降ろそうとする。
「くっ！誰が出ていくもんか！」
紫音は歯を食いしばって、ベッドの奥側にいる誠の腕にしがみつく。
「わっ！いたい！痛いよ紫音！」
誠は今にも泣きそうな声を上げた。
精神的にいろいろ限界なのだろう。
「おい！おまえらも手伝ってくれ！」
紘斗が、後ろで事の成り行きを見守っていた翔太と直矢に援護要請を出す。
「え！？う、うん！」
もう何が何だかわからなくなって、翔太は紘斗の腰に腕を回して引っ張った。
（いや、この状況明らかにおかしいだろ！）
直矢は心の中でそう叫んだが、空気を読んで、翔太の後ろに続き、前に倣って翔太の腰に腕を回して引っ張る。
それはまるで、童話の「大きなかぶ」のような状態であった。
「わぁっ！？」
誰のものとも付かない悲鳴と共に、誠を巻き添えにして、紫音の体がスポーン！とベッドから抜けた。
折り重なるようにして、ドサドサと一同は床へと打ち付けられる。
「いたたた…」
そんな様子をドアの所で見ていた人物が一人。
「君たち、こんな朝早くから、『大根抜き』して遊ぶなんて、元気がいいね」
そう言って彼はふんわりと微笑んだ。

彼が部屋に入った瞬間、その場の空気がキラキラと輝き出す。
「森優樹先輩…！」
思いがけない人物の登場に、一同は床から身を起こすと、ぽかんとしながら呟いた。
「でも、まだ寝ている人もいるから、もう少し静かに遊ぼうね」
「は、はい、すみませんでした！」
一同は立ち上がり、口々に謝る。
「それから、紫音、」
「は、はい！」
紫音の体がビクンと跳ね上がる。
一応、後ろめたいことをしているという自覚はあるようだ。
「君、夜中に寮を抜け出したそうじゃないか。ルームメイトが心配していたよ」
優樹は声のトーンを変えずに淡々と言った。
感情的に怒鳴り散らしたりするよりも、こっちの方が逆に怖いものがある。
「随分探したけど、まさか第三寮にいるとはね」
「す、すみません」
彼は、生徒会長だけではなく、第一寮の監督生でもあるのだ。
「無断外泊の罪は重いよ？まぁ今回は、初犯ということもあるし、今日一日自室謹慎ってことでいいよ」
「そ、そんなぁ…」
「今度やったらもっと重い罰にするからね」
優樹はそう言ってにっこり微笑む。
その笑顔が逆に恐ろしい。
「は、はい…」
紫音はしゅんとうなだれた。
あの神崎紫音を一瞬にしてしおらしくさせるなんて、さすが生徒会長兼第一寮監督生だ。
一年生達は、感心と恐れの入り交じった心情で、その様子を見つめ

ていた。
「我が第一寮の生徒が迷惑かけたようで、すまなかったね」
彼等に向かって優樹はそう言うと、
「また会ったね、翔太」
と優しげに翔太に微笑みかける。
「何か困ったことがあったら、何でも僕に相談してね」
そう耳元で囁やかれ、翔太は優樹のそのふんわりとした柔らかい髪から漂う甘い香りに、なんだか頭がぼーっとなった。
「じゃあ、よい休日を」
そう言うと、森優樹は神崎紫音を連れて部屋を出て行った。
二人の足音が遠退くや否や、紘斗が口を開く。
「翔太！おまえあの生徒会長と知り合いなの！？」
紘斗は驚きと羨望の入り交じった目で翔太を見る。
「う、うん…ちょっとね」
そう言って翔太は直矢と顔を見合わせる。
「すごいなおまえ！森優樹先輩って言ったら、この学校の人気ナンバー1、みんなの憧れの的だぞ！」
紘斗は興奮したように言った。
「え？そうなの？」
「うん、僕も聞いたことがあるよ。なんでもファンクラブがあるとかないとか…」
誠もベッドの枕元にある眼鏡を取って掛けながら、そう言った。
「そ、そうなんだ…ファンクラブ、ね」
何だかよくわからないけど、すごい人なんだな。
翔太がそう思っていると、
「わっ！もうこんな時間！」
直矢が声を上げ、翔太も時計を見る。
「本当だ！もう行く支度をしなきゃ！」
町へ行くバスは二時間に一本。
よって、一本乗り過ごすと一日の予定が狂ってしまう。

翔太と直矢は慌ただしく誠と紘斗の部屋を後にした。

学校から徒歩１５分程のバス停から、バスに揺られること１時間。

「わあ…！」

翔太と直矢は思わず歓声を上げる。

バスを降りると、そこにはちょっとした町が広がっていた。

町と言っても、札幌のような都会には足元にも及ばない程の、商店街に毛が生えたようなものである。

それでも、普段は俗世と切り離された森の中で、軟禁状態である彼等にとっては十分だった。

通りの両脇には、様々な店が軒を連ねていて、見ているだけでも楽しい。

「ねぇ！見て見て！変な柄のＴシャツ～！」

翔太は洋服屋のマネキンを指差したかと思うと、

「あ！本屋さんだ！直矢のお勧めの本とかある？」

と直矢の腕をぐいぐい引っ張って、そのはす向かいにある本屋に向かう。

学校の売店にも本は売っていたが、品揃えの数が違う。

二人はしばらく目の前に広がる本の海を眺める。

「これ、結構面白そうじゃ…」

そう言って直矢は一冊の本を手に取った。

が、

「わぁ！あそこのお菓子おいしそう！」

翔太の興味はすでに、本屋の向かいの和菓子屋さんに移っていた。

「おまえなぁ～、ちょっとはしゃぎ過ぎ」

やれやれといった顔で、直也は本屋を飛び出す翔太の後を追う。

「わぁ～、どれもおいしそう！」

「このお店、地元じゃ有名らしいよ」

二人は、ショーケースに並ぶ色とりどりの和菓子に目を輝かせていた。
すると、
「いらっしゃ～い」
と店の奥からおかみさんと思われる中年女性が現れる。
買う気などなかった二人は、「逃げよう」とお互いに目配せし合った。
ところが、
「あんた達、ここらじゃ見かけない顔だけど、もしかしてあの山の上の学校の生徒さんかい？」
そうおかみさんに訊かれ、
「は、はい、そうですけど……」
と二人は答える。
「やっぱりね！道理で上品で可愛い子達だと思ったよ！」
そう言って、彼女は友好的な笑顔を見せると、
「はい！これサービスだよ！」
とお店の看板商品の饅頭を二つに割り、それぞれ翔太と直矢に手渡す。
どうやら地元での北城学園の評判は、すこぶるいいらしい。
これも歴代の先輩方の素行がよかったおかげであろう。
思いがけない展開に驚きながらも、二人は笑顔で御礼を言うと、早速饅頭を頬張った。
「おいし～い！」
「ああ、この外の皮が少ししょっぱくて、中の餡とのバランスが取れてる所とか最高だな！」
「そっか！だからおいしいんだ！てかすごいな直矢、なんか和菓子評論家みたい！」
そんな二人を見て、お店のおかみさんは満足そうに笑いながら、
「それ食べて勉強頑張るんだよ」
と二人を送り出した。

再び御礼を言い、翔太と直矢は店を後にする。
「あの学校の生徒で得することもあるんだな」
「うん、僕は今、北城学園の生徒でよかったって心から思うよ」
「おまえ、単純だな～」
そう言って、ふたりは笑い合う。
その後も二人は町の中を探検して、楽しい時を過ごした。
端からみると、はしゃぎ回る翔太に直矢が振り回されているように見えなくもない。
が、しかし、直矢もそんな状況を心底楽しんでいた。
翔太と一緒にいると楽しい――
入学して以来、直矢は常日頃からそう思うようになっていた。
翔太と出会ってから、まるで世界が変わったかのように、毎日が楽しく思えるのだ。
たまに迷惑かけられたり、変なことに巻き込まれたりすることもあるけれど、それを差し引いても楽しかった。
かつての級友が、今の直矢の姿を見たら驚くに違いない。
なぜなら、この学校に入る前の直矢は、クールで大人びたちょっと近寄がたい少年で、それなりに友達はいたが、高学年になってからは、こんな風に誰かと心から笑い合うことなんて、およそなかったからだ。
おそらく翔太には、大人びていた彼を、歳相応の少年に戻す力があるのだろう。
とにかく、翔太との出会いが、直矢にとってプラスに働いていることには間違いなかった。

そうこうしているうちに、お昼になったので、美味しいと先輩達の間で話題になっているパン屋さんへ行くことにした。
店内は広く、ちょっとしたカフェのような場所が併設されていて、買ったパンをその場で食べられるようになっている。

おいしそうな匂いが漂う中、翔太と直矢はそれぞれパンを物色し始める。
日曜日のお昼時ということもあって、店内は賑わいを見せていた。
そんな中、翔太は若い女性の二人組が、何やら話しながら、直矢の方を見ていることに気付いた。
「ねぇねぇ、あの子、すごく可愛くない？」
「わぁ、ほんとだ！可愛い～！」
そんな会話が聞こえて来る。
食事を終え、店を出てからもそうだった。
今まで、色々なことに夢中になり過ぎていて気付かなかったけど、道ですれ違う女の人達が、直矢に視線を送ってくるのだ。
女子高生、ＯＬ風の人、小中学生、主婦、中には小さい女の子まで、かなりの確率で、直矢の方を見てくる。
「可愛い」だとか「キレイな子」だとか「美少年」だとかいう単語がちらほら聞こえて来ることもある。
翔太は今まで、一人で歩いていても、こんな風に女の人からの視線をもらったことなんて、一度たりともなかった。
だから彼女たちの視線が、直矢に向けられているということには間違いない。
やっぱり、これだけ美少年だと生きてる世界が違うんだな。
翔太は少しカルチャーショックを受けた。
「どうかしたのか？」
先程まであんなにはしゃいでいたのが、急に大人しくなったので、直矢は心持ち心配そうに翔太を見た。
「ねぇ直矢！女の人たちが直矢の方を見てるよ！」
翔太は少しそわそわしたように直矢の袖を引っ張った。
「そうか？別に普通じゃない？」
平然とした様子で直矢は言う。
いや、絶対普通じゃないよ！
翔太は心の中でそう思った。

ああ、そうか。
きっとこの人、こんなことは日常茶飯事なんだろうな。
だから、すっかり慣れてしまってるんだ。
「直矢って小学校の時、モテたでしょ」
「え？別にそんなことないよ」
モテる人に限ってそう言うのだ。
「またぁ～、もしかして、カノジョとかいるの？」
直矢とこういう話をしたのは、これが初めてだった。
お互い余り興味がなかったので、今まで話題に上らなかったのだ。
別に今だって、そこまで興味があるという訳ではない。
だけど、あまりの直矢のモテっぷりを目の当たりにして、少し聞いてみたくなったのだ。
ただ、それだけのことで、別に深い意味なんてなかった。
「いないよ、そんなの」
直矢は素っ気なく答える。
翔太はそれを照れ隠しだと思い、さらに質問を重ねた。
「でも、女の子の方が放って置かないんじゃないの？ねぇ、本当はいたんでしょ？」
その時、直矢の顔が陰ったことに、翔太は気付かなかった。
「女なんか…嫌いだ」
「またまたぁ、そういう人に限って早く結婚したりするんだよね」
相変わらず、照れていると勘違いしている翔太は調子に乗る。
「俺は女なんか大っ嫌いなんだ！一生彼女なんていらないし、結婚だってしない！」
直矢は声を荒げて言い放った。
直矢がこんな風に怒っているのを見るのは、入学以来初めての事だったので、翔太はひどく驚いた。
もしかして、自分は何かとんでもないことをしてしまったのではないか――
直感的にそう思い、翔太は謝った。

確かに、少ししつこ過ぎたかもしれない。
「ごめん……」
だが、直矢は俯いて黙ったままだった。
二人の間に、何とも言えない気まずい空気が流れる。
翔太と直矢は、顔を合わせないまま、無言で歩き続けた。

どのくらいそうしていただろうか。
何も喋らなくなってから、随分と時間が経ったように思える。
いつの間にか、賑わいを見せていた町並みは過ぎ去り、道の両脇には、シャッターの降りた店や、壊れかけた建物が寂しそうに立ち並んでいた。
相変わらず、直矢は険しい表情をして下を向いたままだ。
もしかして、自分は直矢のこと、何も知らないのではないか。
翔太は歩きながらそう思った。
なんであれくらいのことでそんなに怒るのか、正直わからなかった。
もちろん、自分も悪かったと思っている。
でも、あれはまるで、心の奥にある他人には触れられたくないものに、触れられたかのような反応だった。
きっと、自分では気付かないうちに、直矢を傷つけるようなことをしてしまったのではないだろうか。
もしかして、今回に限らず、今までにも知らず知らずのうちに、彼のことを傷つけてしまっていたのかもしれない。
思えば、直矢のこと、ちゃんと考えて行動していただろうか。
なんとなく、一緒に楽しく過ごせればいい。
それくらいしか考えていなかったのではないだろうか。
思い起こせば、自分のことを直矢に話すことはあっても、直矢が彼自身のことを話すのは、聞いたことがない。
一ヶ月近くも寝起きを共にし、一緒に机を並べて勉強して、仲良くなったつもりでいた。
けれど、本当のところは直矢のこと、何もわかっていないのだ。

翔太は、なんだか急に直矢が遠い存在のように感じた。
直矢に出会う前――この学校に入る前は、友達に対して、いちいちそんなこと気にしたこともなかった。
なんとなく仲良くなって、楽しく一緒に遊んでいただけで、深いことは考えたこともなかった。
だから、今のこの気持ちが、何だかちょっぴり変な感じがする。
でも、このままではいけないと思った。
もっと、直矢のことを深く知りたい――
もっと、彼のことを理解したい――
そしてもっと、お互いに分かち合いたい――
翔太は強くそう思った。
「あのさ……」
翔太と直矢が声を発したのはほぼ同時だった。
何だか気恥ずかしくて、二人は頬を赤らめ下を向く。
そして、再び沈黙が訪れた。

翔太が色々思い悩んでいる一方、直矢もまた、思いを巡らせていた。
さっきはつい、翔太に対してきつく当たってしまった。
あの時は、一番触れられたくない部分に触れられて、カッとなってしまったのだ。
何であんな風に言ってしまったのか、今はとても後悔している。
そんな罪悪感の中、もう一つの思いが直矢の中に生まれていた。
翔太に、もっと自分のことを知ってもらいたい――
そう思っている自分自身に驚く。
今まで、誰かに対してこんな気持ちになったことなんて、一度もなかった。
友達とも、心の中身は打ち明けず、ごく表面的な付き合いしかしたことがなかった。
もしかして、本当の意味での友達などいなかったのかもしれない。
どうせ誰も理解してくれるわけがない。

今までずっと、そう思っていた。
なのに、どうしてだろう？
自分でもなぜだかわからないけど、翔太に話してみたくなったのだ。
普段は鍵をかけてしまってある、自分の心の奥底の部分を――
自分のすべてを受け止めてほしい。
すべてさらけ出して、お互いもっと深い部分でわかり合いたい。
直矢は翔太に対してそう思うようになっていたのだった。

その時、前方に小さな公園が見えた。
何も言わなくても、自然とそこへ二人の足が赴く。
園内には雪解け後の少し茶色っぽい芝生が広がっていて、広葉樹が立ち並ぶ奥の方には、木製のベンチが静かに佇んでいた。
休日だというのに、人の姿はない。
「座ろうか」
そう口を開いたのは直矢だった。
「うん」と翔太は頷き、二人はベンチに並んで座る。
「さっきは、ごめん……」
直矢は下を向いたまま、静かにそう言った。
「ううん、僕の方こそ、直矢の気持ちも考えずに……」
「いいんだ、翔太は悪くないんだ。俺、さ……」
直矢はそこで言葉に詰まる。
翔太は息を飲んで、次の言葉を待つ。
すると、おもむろに直矢は再び言葉を紡ぎ出す。
「俺の母親はさ……俺が小四の時、男と一緒に家を出て行ったんだ」
「え…？！」
「俺と姉さん、それと父さんを捨てて……」
直矢は斜め下の、ある一点を見つめたまま話し続ける。
「俺が物心付く頃から、毎日違う男を部屋に連れ込んで、俺が幼稚園や学校から帰っても、男と部屋に篭りっぱなしだった」
翔太はどう言葉を掛けたらいいかわからなかった。

直矢の過去にそんな辛いことがあったなんて…
それにしても、小四とはまた何とも絶妙な年頃である。
直矢は、表情を歪めながら、さらに続ける。
「それでも、母さんは優しかった。なのに、なのに……」
直矢の中で、あの時の記憶が呼び覚まされる。
二年半前の初秋、男と連れ立って去って行く母親の背中を、姉さんと二人で必死で追い掛けた。
――行かないで！母さん！行かないで！――
そう泣き叫びながら、必死で追い掛けた。
だが、母さんは戻って来なかった。
真っ赤な落ち葉が、ゆらゆらと秋風に舞っていたのを今でもはっきりと覚えている。
「女なんか、嫌いだ」
直矢は震えた声で言った。
「姉さんは姉さんで、男取っ替え引っ替えしてるし……」
女嫌いになるにはそれ相応の理由があるのだと、翔太は妙に納得した。
「身体を武器に男を誘惑して、簡単に捨てる。女なんか、大嫌いなんだ！」
いつしか直矢の声は、嗚咽へと変わっていた。
膝の上で握りしめられた手に、大粒の涙がポタポタと落ちる。
「直矢……」
しっかり者で、勉強もスポーツもできて、何をやってもカッコイイ自慢のルームメイト。
そんな彼が今目の前で、あられもなく泣いている。
翔太は、直矢のその小刻みに震える肩が、何だかとても小さく感じた。
守りたい――
そんな感情が翔太の中で生まれていた。
恐る恐る、翔太は直矢の背中に手を添える。

そして、自分のよりも少しだけ広いその背中を優しく摩った。
「ねぇ、直矢……、僕は、ずっと一緒だよ。直矢のお母さんの代わりにはなれないけど、友達として、ずっと直矢のそばにいるよ」
自分でも何を言っているのかよくわからなかった。
ずっと直矢のそばにいて、直矢のことを守りたい――
直矢の力になって、支えてあげたい――
いつも助けて貰ってばかりだけど、今度は自分が直矢のことを助けたい――
そんな気持ちが翔太の中で溢れ、それを伝えようと必死だった。
「翔太……」
直矢は少し驚いたように、涙で濡れた顔を上げた。
「ずっと？」
あどけない表情で、直矢はそう聞き返す。
「うん！ずっと！」
そう言って翔太はにっこり微笑んだ。
背中に置かれた手の温かさを感じながら、直矢も照れ臭そうに微笑む。
穏やかな春風が辺りの木々を揺らす。
芽吹いたばかりの枝と枝とが擦れ合う音が、カサカサと静かな公園に鳴り響いていた。

帰り道、学園へ向かうバスの中、翔太と直矢は身を寄せ合うようにして、穏やかな寝息を立てていた。
その無垢な寝顔はとても幸せそうで、周りの乗客たちは、そんな二人を微笑ましく見守っている。
色々あって疲れたのか、二人はすっかり夢の中だが、その手と手はしっかりと繋がれていた。
バスは幼い二人を優しく揺らしながら、森の奥深くへと運んで行く

のだった。

第六話　春のうららの（前書き）

外国では挨拶なんです

第六話　春のうららの

第三寮の朝は慌ただしい。
あちこちの部屋から鳴り響く目覚まし時計の音。
部屋と洗面所を行き来する少年達の足音に加え、連絡事項を伝える為に奔走する者の足音と、とにかくドタバタ騒がしい。
そんな喧騒の中、５３号室では、先程から翔太が鏡に向かってネクタイと必死で格闘していた。
しかし、何度結び直しても、どこかしら歪んで妙な形になってしまう。
「え～ん、うまく結べないよ～」
翔太は直矢に助けを求める。
「ったく、しょうがないなぁ～」
すでに身支度を終えている直矢は溜め息混じりにそう言うと、翔太の首にだらんとぶら下がっている学年カラーの青色チェック柄のタイに手を伸ばす。
白く細い指が翔太の胸元で舞い、ネクタイはあっという間に美しい形に整った。
「ありがとう！やっぱ直矢はうまいなぁ」
「もう入学してから一ヶ月になるんだから、いい加減自分で出来るようになれよ」
「あれ？ハンカチどこだっけ？」
「話を逸らすな！」
翔太のネクタイを毎朝結んであげることが、入学以来直矢の日課になってしまっていた。
直矢は元々そんなに面倒見のよい性格ではないはずなのだが、翔太が相手だと何だか放って置けなくなってしまうのだ。
翔太が自分に対して、真っ直ぐな信頼を寄せてくれているのが嬉しくて、本人の為にならないとわかっていても、ついつい世話を焼い

てしまう。
「おまえ、一生一人で結べるようにならなかったらどうするんだよ」
そう言われ、翔太は言葉に詰まった。
このままではいけないと自分でもわかってはいるのだ。
「いいもん、一生直矢に結んでもらうから」
翔太はいじけたように口を尖らせる。
「ば、ばか！そんなのまっぴらごめんだ！」
苦し紛れの屁理屈だと分かっていながらも、直矢は思わず赤面してしまう。
「はいはい、朝からお熱いですね」
いつの間にか、紘斗がドアのところに立っているということに、二人は気付いた。
「あ、紘斗」
「今日の一時間目の理科の授業は、校庭集合だってさ」
このような連絡事項をみんなに伝えるのも、学級委員と会計委員の役目である。
「うん、わかった」
「了解ー」
「あ、このこと光輝とトミーにも伝えといて！」
そう言うと、紘斗は慌ただしく部屋を去る。
会計委員は学級委員の補佐的な仕事もこなしているので、何かと忙しいのだ。
「じゃあ、僕伝えてくるね」
そう言って翔太は、光輝と知のいる隣の部屋へと向かった。
「光輝ー、トミー」
翔太は開き掛けていた５４号室の扉の隙間から、中を覗き込む。
「うわぁ！？」
驚きのあまり、翔太は声を上げ、その場に尻餅を付いた。
その衝撃で、半開きになっていた扉がキィ―ッと音を立てながら、ゆっくりと全開になっていく。

まるで、天使が二人いるかと思った。
朝日が差し込む部屋の奥の窓際で、光輝と知が向かい合い、唇と唇を合わせていた。
窓から差し込む柔らかな光が二人を照らし、その髪が、肌が、キラキラと輝いている。
それは思わず見取れてしまう程の美しい絵であった。
「おい、大丈夫か?!」
声を聞き付けた直矢が、隣の部屋の前で腰を抜かしている翔太に駆け寄る。
「ってうわぁ?!」
翔太を後ろから助け起こそうとする直矢の動きが止まった。
翔太はこの時初めて、自分がとんでもないものを見てしまったということに気付く。
不思議と気持ち悪いとは思わなかった。
今この時まで、男同士で口付けを交わしているということを気付かせないほど、それは美しく、神聖な雰囲気を漂わせていたのであった。
「な、直矢…!おと…男同士で、キス…」
翔太は顔を赤くし、口をぱくぱくさせて言った。
直矢も頬を赤く染め、呆然とその光景に見入る。
そんな二人の存在にようやく気付いたのか、知はかあぁっと赤くなって、飛び退くように光輝から離れた。
「あ!翔太!直矢!」
光輝は悪びれた様子を全く見せず、いつも通りの天真爛漫な笑顔で、二人に歩み寄る。
「光輝…、あ、あの…その…」
赤面し、自分と目を合わせようとしない友人二人を見て、光輝は首をかしげると、やがて思い付いたように「あぁ、そっか!」と言う。
「びっくりさせてごめんね!これ、おはようの挨拶なんだ」
「え?挨拶?」

「うん！北欧では、こうやってキスするのが挨拶なんだよ」
そう言って光輝はにっこりと微笑む。
「なんだ～、そっかぁ」
翔太はホッと息を吐いた。
そういえば、キスが挨拶だという国があると聞いたことがある。
「おまえ、北欧にも住んだことあるんだ。この前は、ドイツにいたとか言ってなかったっけ？」
そう訊く直矢の頬は、まだ僅かに赤かった。
「うん、ドイツにも住んでたことあるよ。あと、フランスとイタリアにも！あ、スイスもあったっけ！北欧には、日本に来る直前まで住んでたんだ」
「わあ、いろんな国に住んでたんだぁ！すごいなぁ！」
そう言って翔太は目を輝かせる。
「じゃあ、もしかしてドイツ語とフランス語と、あとイタリア語も話せるのか？」
直矢も興味津々な顔つきだ。
「うん！あとフィンランド語とロシア語も少しだけなら話せるよ」
光輝は少し得意げに言った。
「すご～い！」
「マルチリンガルじゃん！」
「でも、向こうと日本じゃいろいろ違い過ぎて困っちゃうよ。おはようのキスだって、本当は翔太と直矢にもしたいのに、トミーが普通の日本人はびっくりするから、自分以外の人としちゃダメって言うんだ」
「光輝っ！」
知は耳まで真っ赤になって、そうたしなめるように言った。
「い、いや、僕は純日本人だから、そういうのは遠慮しとくよ」
「うん、俺も」
翔太と直矢は困ったような笑みを浮かべ、僅かに後ろへと下がる。
「そっかぁ、残念だなぁ」

光輝はしょんぼりとした様子で、上目使いに二人を見る。
その大きな瞳は、光の加減により茶色にも緑色にも見え、なんだか見ているうちに吸い込まれてしまいそうだ。
「な、なんか邪魔したみたいでごめんね」
「じゃ、また後でな」
翔太と直矢はそう言うと、そそくさと部屋を後にした。
「そういえば、おまえ連絡事項は伝えたのか？」
「あっ！いけない！すっかり忘れてた！」
挨拶だとは言われても、やはり少しドキドキしながら、翔太は今出て来たばかりの５４号室へと引き返すのだった。

ぽかぽかとした春の陽気に包まれる校庭。
北城学園の周辺も、ここ数日で随分と春めいては来ていたが、今日は平年並みの気温を大きく上回る、また一段と春らしい日であった。
「今日は天気もいいので、森の中の生物を探しにいきましょう！」
こんな日はやはり外に出るに限る。
理科教師、村崎史郎のその言葉に、彼の前に集まっていた一年三組の生徒達からわっと喜びの声が上がった。
彼の痩せ細ったその顔は相変わらず青白く、辺り一面に広がりを見せるこの麗らかな春の情景が、一層その不健康さを際立たせていた。
この三十代後半くらいのひょろりと痩せた理科教師は、事あるごとにサプリメントだけで食事を済ませていると自ら豪語しているのだが、実際本当なのだろうか。
彼が食堂に姿を現した所を見た者は誰もいないということや、校医から度々食生活に対する指導を受けている所を多数目撃されているということ等から、どうやらそれは真実であることが窺える。
世の中には沢山の美味しい物があるというのに、なんでそれらを食べずに、わざわざサプリメントなんてつまらないものを食べたがる

んだろう？
大人というのはわからないな。
翔太は理科の授業の度に、そう疑問に思うのだった。
ここ北城学園は、豊かな自然に囲まれており、校庭と森とが繋がっている。
むしろ一体化し過ぎて、どこまでが学校の敷地で、どこからが森なのかがわからない。
村崎を先頭に、少年達はぞろぞろと森の中へと入って行った。
すると、そこはもうすっかり春だった。
あちこちで新緑が芽吹き、小鳥達のさえずりが心地よく響いている。
まだあまり葉を付けていない木々の隙間からは、青く澄んだ空が見え、柔らかな陽光が降り注ぐ。
それは訪れる者の心を躍らせた。
「それではみなさん、珍しい生き物や植物を見つけたら、このプリントにスケッチして後で提出して下さい」
そう言って村崎は、教え子達に用紙を配った。
用紙を手にするや否や、彼らはわいわいとあちらこちらに散らばる。
ある者はしゃがんで草むらに顔を突っ込み、またある者は木に上り、皆思い思いに授業を楽しんでいた。
そんな中、茂みに手を突っ込んでいた光輝が、何かを掴んで取り出した。
「ねぇねぇ見て見て！変な柄のロープが落ちてたよ！」
笑顔でそう言い、近くにいた直矢に手を突き出すようにしてそれを見せる。
「わあぁぁっ！」
直矢は甲高い悲鳴を上げ、隣でキョロキョロ辺りを見回していた翔太に思わず抱き着いた。
「え？！直矢、どうしたの…ってうわあぁ？！」
翔太も跳び上がり、直矢に抱き着き返す。
「二人ともどうしちゃったの？」

光輝はそんな二人を見て首を傾げる。
「翔太っ…！お、俺…、蛇は苦手なんだ…！」
そう言って直矢は翔太にしがみつくようにしてガタガタ震える。
「ぼ、僕だって嫌いだよ！」
翔太も直矢の制服のブレザーをぎゅっと掴んだ。
「ああ、これは青大将といって毒はもってないから安心していいですよ」
騒ぎを聞き付けてやって来た村崎は、まるで愛おしいものを見るような目で、光輝の手に握られた緑色の太いロープのような爬虫類を見つめて言った。
「わあ！そうなんですか！ねぇ、翔太、直矢、スケッチするからちょっとこれ持っててくれない？」
そう言って、互いに抱き合って震えている翔太と直矢に蛇を持った手を突き出しながら、光輝は満面の笑顔で近付く。
毒があるかないかの問題ではない。
その独特の細長い形状。
うねうねとしたうごめき。
おどろおどろしい模様。
ああ、それはなぜそんなにも人間を恐怖のどん底に突き落とすのだろう。
「うわあぁぁぁ―！絶っ対嫌だぁ！」
そう叫んで翔太と直矢は走って逃げる。
「ねぇ、ちょっと待ってよ～」
光輝は蛇を持ったまま追い掛ける。
「トミー！何とかしてくれ―！」
直矢は助けを求めて叫んだが、その時知は、森の中にひっそりと咲く可愛らしい花を観察するのに夢中で、その声は届かなかった。
と、そうこうしているうちに、
「わぁ！川だ！川だぁ！」
とクラスの中の一人が声高に叫んだ。

耳を澄ませば、微かに水が流れる音が聞こえてくる。
「え―?!どこどこ?!」
一同はわいわいとその少年の元へ集まっていく。
するとそこには、小さな川がさらさらと流れていた。
木々の隙間から差し込む柔らかな光が、水の流れに反射して煌めいている。
川の水はとても透き通っていて、川底が透けて見えた。
よく見ると、小さな魚が数匹泳いでいるのが目に入る。
この年頃の少年達が、こんな綺麗な川を目の前にして、中に入って遊ばずにいられるわけがない。
彼らは歓声を上げながら、靴と靴下を脱ぎ捨てると、制服のズボンを膝までたくしあげ、次々と川の中に入って行く。
翔太と直矢も、みんなと一緒にまだ冷たい水の中へと足を踏み入れる。
水の深さは翔太の膝より少し下くらいだった。
光輝もあっさり蛇を逃がし、
「ねぇほら、早く行こうよ～」
と言いながら、遠慮がちに川の方を見ている知の手を引っ張る。
わいわいきゃっきゃとはしゃぎ立てる声が響き渡り、バシャバシャと水飛沫が飛び散った。
少年達のそのすべすべとした滑らかなふくらはぎは陽の光に晒され白く輝き、宙を舞った水滴はキラキラと光を反射させる。
それはとても美しい光景だったが、子供達を監督しなければならない教師の立場としては、そうも言っていられない。
「こらこら皆さん!そんなにはしゃぐと危な…」
村崎史郎がそう言いかけた時だった。
眩しい春の陽差しが彼の目を直撃する。
「あっ…」
村崎は短く叫ぶと、くらっとよろめき、そのままバランスを崩して川の中へと落ちて行った。

バシャーン！と激しい水飛沫が上がる。
「村崎先生？！」
生徒達は驚いて、先生が落下した地点へと駆け寄る。
「先生、大丈夫ですか？！」
口々にそう声をかけるが、村崎先生は俯せのまま水面の上にだらりと浮いているだけで、動く気配はない。
「おい！岸まで運ぶぞ！」
クラスのみんなに向かってそう言ったのは、紘斗だった。
彼はこういう時にはいつも、学級委員の誠以上にリーダーシップを発揮してくれる。
紘斗と誠が中心となり、みんなで力を合わせて村崎史郎の体を河原まで運び込む。
そして、水を吸ってずっしりと重くなったその体を、青々とした草の上に仰向けに寝かせた。
「先生ー！聞こえますか？」
紘斗が、そのいつもに増して青白くなった顔の傍らにしゃがみ込み、そう呼び掛けるものの返事はない。
「う～ん、こうゆう時は…」
紘斗は、すっかり意識を失なってしまっている村崎先生の顔を真剣な表情で眺める。
他の生徒たちは見守るようにその周りを取り囲み、次の言葉を待った。
「人口呼吸」
紘斗がそう言った瞬間、一同はササーッと後ずさる。
「じ、実は僕、ファーストキスがまだなんだ！」
うっかり紘斗と目が合ってしまった翔太は、そう言ってさらに一歩後ろに下がった。
「お、俺も！」
隣にいた直矢もそれに便乗する。
「おいおい、人の命がかかってるんだぞ！そうだ！光輝、おまえ外

国育ちなら、こういうの慣れてるだろ？」
紘斗はそう言って光輝の方を見る。
が、その隣にいた知から尋常ではない鋭い視線が送られて来る。
「い、いえ、なんでもないです！」
「てか、そう言う紘斗がやればいいじゃん！クラス代表としてさ」
そう誰かが言うと、
「そーだそーだ！」という声が上がる。
「ちょ、ちょっと待て！クラス代表と言ったら、やっぱ学級委員長だろ！ってあれ？委員長は？」
紘斗はキョロキョロと辺りを見回したが、誠の姿は見当たらない。
すると、その時だった。
「おーい！校医の先生連れて来たよ～！」
誠が校医と思われる、眼鏡を掛けた背の高い三十歳前後の男と一緒に走って来るのが見える。
さすが学級委員長。
やることが的確である。
校医の先生は、屈んで村崎先生の様子を診ると、みんなの方に向き直って言った。
「いい機会なので、溺れた人の助け方をみんなもよ～く見ておくように」
ああ、楽しい理科の授業が一転して人命救助の講習だ。
「まず、意識確認だ」
そう言うと、まだ若い校医の先生は、村崎先生の耳元に顔を近づける。
「おい、史郎、大丈夫か？」
ハスキーな色っぽい声で、囁くようにそう呼びかけ、ふぅっと耳に息を吹きかける。
すると、村崎先生の身体がビクンと跳ねた。
「よし、次は人工呼吸だ。まずは気道確保！」
校医の先生は慣れた手つきで村崎先生の顎をクイッと引き上げる。

「そして、人工呼吸」

そう言って、彼は掛けていた眼鏡を外すと、力なく横たわる村崎史郎の顔に、ゆっくりと顔を近づける。

周りで見ていた少年達はゴクンと息を飲み込む。

村崎先生の口からうめき声のようなものが聞こえた気がしたが、校医の先生はお構いなしに、その青紫色になった唇に自らの唇を重ねる。

「おおっ！」というどよめきの中、声にならない悲痛な叫びが、穏やかな春の森に響き渡った。

第六話　春のうららの（後書き）

倒れている人を見つけたら、人工呼吸よりも心臓マッサージを優先させましょう！て消防士さんが言ってた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3208u/

いち、にー、３組！

2011年10月8日17時56分発行